

323

545

俳諧文選

国立国会図書館

5 6 7 8 9 0m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

始



AI-1F-6

俳諧文選

附 俳句連句選

漢文選

凡例

◎本書は、高等學校の講讀用として編纂したるものなり。

◎本書は、主として元祿時代の俳文中より之を採擇せり。その他、也有の俳文八篇と、蕪村及び一茶の文章各三篇とを併せ載せたり。

◎なほ本書は、附録として俳句及び連句を添ふ。俳句は、各時代の作例を示して斯道の推移を知らしめんとし、連句は、二三有名なるものを選びて其の一斑を窺ふよすがとしたり。



大正
13. 4. 5
内交

323-545

俳諧文選

目次

柴門辭	松尾芭蕉	一頁
燒蚊辭	松倉嵐蘭	二
鉢扣辭	向井去來	三
既望賦	松尾芭蕉	五
旅賦	横井也有	六
四梅廬賦	僧李由	一〇
百蟲譜	横井也有	一一
百魚譜	同	一五
蓑蟲說	山口素堂	二〇
嘲宵惑說	北山毛紈	二一
長雪隱解	森川許六	二二
菽醫者解	松井汶村	二三
落柿舍記	向井去來	二四
幻住庵記	松尾芭蕉	二五頁
十八樓記	同	二八
芭蕉堂再興記	谷口蕪村	二九
鹿島紀行	松尾芭蕉	三二
宇治行	谷口蕪村	三四
遠千鳥序	上島鬼貫	三五
宴柳後園序	各務支考	三六
銀河序	松尾芭蕉	三七
鼻箴	横井也有	三八
嵐蘭詠	松尾芭蕉	三九
俳諧發願文	僧浪化	四〇
弔古戰場文	松尾芭蕉	四二
東順傳	同	四三

目次

一

翁曰、世上の俳諧の文を見るに或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢音を入れ言葉あらく賤しくいひなし、或は人情をいふとては今日のさかしきくまへまで探りもとめ、西鶴が浅ましく下れる姿あり。我が徒の文章は、たしかに作意を立て、文字はたとへ漢章をかるともなだらかにいひつゝ、事は鄙俗の上におよぶともなつかしく云ひとるべしとなり。

二葉集

物忘翁傳……………横井也有……………四四
 妖物論……………横井也有……………四五
 手足辯……………松井汶村……………四六
 嘲佛骨表……………榎本其角……………四七
 翁贊……………谷口燕村……………四八
 奈良團贊……………横井也有……………四九
 おらが春……………小林一茶……………五〇

露の世 牡丹……………松尾芭蕉……………五三
 年の暮……………松尾芭蕉……………五四
 笈の小文……………松尾芭蕉……………五四
 發端……………横井也有……………五六
 臍頰……………横井也有……………五六

○附録

一併句選

岩路	森川	凡許	向井	服部	智月	山口	山上	井原	北村	山本	松永	山崎
田涼	川許	六兆	去來	鳳蘭	月尼	素堂	鬼貫	西鶴	季吟	西武	貞德	宗鑑
菟通	六兆	兆來	來蘭	蘭尼	尼堂	堂貫	貫素	素西	西季	季吟	吟武	武德
各務	志田	廣瀬	僧瀨	園藤	内藤	榎本	杉山	松尾	小西	西山	安原	荒木
支野	野瀨	惟浪	浪化	女草	其角	文草	杉風	芭蕉	來山	宗因	重賴	守室
考坡	坡然	然化	化女	女草	草角	角文	文風	風蕉	蕉山	山因	因賴	賴室

二連句選

炭市	猿袋	中	炭	大	高	僧	高	井	高	井	大	炭	中
梅が香	猿袋	中	炭	大	高	僧	高	井	高	井	大	炭	中
秋の空	猿袋	中	炭	大	高	僧	高	井	高	井	大	炭	中

俳諧文選

柴門辭

(送歸三許六之故郷一錢別之文也)

芭

蕉

(一)元祿五年

(二)論語子罕篇、
「吾少也賤、故多能
鄙事」

(三)後鳥羽院御口
傳

去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別をしむ。其の
 わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて、終日閑談をなす。其の器繪を好み風
 雅を愛す。予こゝろみに問ふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。
 風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其のまなぶ事二つにして、用をなす事
 一なり。まことや君子は多能を恥づといへれば、品二にして、用一なる事感すべき
 にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は
 精神微に入り、筆端妙をふるふ、其の幽遠なる處、予が見る所にあらず。予が風雅は
 夏爐冬扇のごとし、衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿、西行のごとばのみ、かり初
 にいひちらされし、あだなるたはぶれごとも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇の
 かゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびをそふると、の給
 ひ侍りしとかや。されば此の御こと葉を力とし、其のはそき一すぢをたどりうしな

(四)空海

ふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大
師の筆の道にも見たり。風雅も又これに同じといひて灯をかゝけて、柴門の外
におくりてわかるゝのみ。(風俗文選)

焼蚊辭

嵐 蘭

(一)莊子、「十歩一
啄、百歩一飲、不求
音於樊中」

蚊、蚊、帳中の蚊、汝を焼くに辭をもてす。汝此の辭を聞く時は、わが手に死す
とも、自ら足れりよせよ。それ澤雉は、樊中にやしなはれんことをねがはずと、彼
は心をとる。これは食をもとめて、人の肌にせまる、かれを愛せんや。これをにくま
んや。さゝすは草にかくれて、草の爲にやかる。汝は帳に入つて、帳の爲にやかる。
あはれなるかに、いづれどかせんや。
蚤、促織の火に入るは、戀ゆわとさけばわりなしや。雨に濡れ露にそぼちて、さ
そはれし風だにもつらし。げに玉の緒の絶なん事もしらす、いく偽の夜や頼み
來し。汝がやかるゝ事、何を情とせん。義經の逆落は、暫時さしおく。須山小宮
山が夜討は、かくれて謀をなすといへども、天下の爲にして、名おのづからした
がふ。又汝といはんや。虞舜は頑父をさけ、日本武尊は夷賊をのがれ給ふ。共に天

(二)元弘元年九月
の二人夜討により
並置城没落す

(三)魯の盜跖、楚
の莊蹻共に大盜なり

(四)憶良「憶良ら
は今はまからん子
泣くらん其子の母
もわを待つらんぞ

にして、汝といふべきにあらず。大盜わに樞戸を穿たんや。汝がふるまふを見る
に、帳をたるゝ時は、其翻々の間をうかひひ、垂れをはつて縦横の透間をたづね
すべて小破の所をもとめ、人のしりへにつきて入らんとはかる。嗚呼跖蹻が徒に
はあらし。
すべて汝のおこなふ處、猛き事もなく、たのしむ事もなく、あはれなるかたにも
やさしきかたにもあらず、たゞ憎むべきものゝ甚しき也。
蚊、蚊、帳中の蚊、汝をやくに辭をもてす。汝此ことばをきく時は、我手に死す
ともみづから足れりよせよ。

子や啼かん其子の母も蚊の喰はん (風俗文選)

鉢扣辭

去 來

師走も二十四日、冬もかぎりなれば、鉢たゞき聞かんと、例の翁のわたりましけ
る。こよひは風はげしく、雨そぼふりて、とみにも來らねば、いかに待ちわび給
ひなんといぶかりおもひて、
箒こせ真似ても見せん鉢扣、と灰吹の竹うち鳴らしける、其の聲妙也。火宅を

(一)「米やらぬ我家はづかし鉢叩」

(二)「面白や叩かぬ時鉢叩」

(三)「月雪や鉢たき名は甚之丞」

(四)「ことごとく寝覺はやらじ鉢叩」

(五)「木下長嘯の墓西山花の寺にあり白集に鉢たききの文あるなり」

出でよとはのめかしぬれど、猶あはれなるふしぐの、似るべくもあらず。かれが修行は瓢箪をならし、鉦打ちたき、二人三人つれてもったひ、かけ合ても諷ふ。其の唱歌は空也の作也。かくて寒の中と春秋の彼岸は、晝夜をわかず、都の外、七所の三昧をめぐりぬ。無縁の手向のたふさければ、かの湖春も、わが家はづかしとはいへり。常は杖のさきに茶筌をさし、大路小路に出でて商ふ。業かはりぬれど、さま同じければ、た、かぬ時も鉢叩とぞ、曲翠は申されける。あるひはさかやきをすり、或は四方にからげ、法師ならぬすがたの衣引きかけたれど、それも黒染にはあらず。おほくは萌黄に鷹の羽打ち、がへたる紋をつけて著たれば、月雪に名は甚之丞と越人も興じ侍る。されば其角法師が去年の冬、ことごとく寝覺はやらじと吟じけるも、ひとり聞くにや堪へざりけん。打ちとけて寝たらんは、かへり聞かんも口をしかるべし、明かしてこそこの給ひける。横雲の影よりからびたる聲して出で来れり。げに老ばれ足よわきものは、友だちにもあゆみおくれて、ひとり今にやなりぬらんと、翁の

長嘯の墓もめぐるか鉢たき、と聞ね給ひけるは、此あかつきの事にてぞ侍りける。(風俗文選)

既望賦

芭蕉

望月の殘興なほやまず、今宵は二三子にいさめられて船を堅田の浦にはす。其日もたそがれのはどならむ。なにがし成秀といふ人の家の後に漕人れて醉翁狂客の月にうかれて来れるありと、船の中より聲々によばふ。あるじは思ひかけず、おごろさよろこびて簾をまきらりはらふに、その後園に芋ありさ、げありて鯉鮒の切目たさぬにしもあらず。やがて岸上に榻をならべ、菴をのべて、おのゝいざ宵の宴を催す。月はまづほどもなくさし出でて、湖上はなやかに照りわたれり。兼ねてきぬ、仲秋の浮御堂にさしむかふを鏡山といふなるよし。今宵なほそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水莖は左右にわかれて、その間に十二峯の影をひたす。とかくいふほごに、月も三竿にして、黒雲のうちにかくれたれば、いづれか鏡山といふ事をわかす。されどあるじの興をそへて、をりく雲のかゝるこそと客をもてなせる心ざし、いと切なり。やがてその月の雲をはなるほご、水面に玉塔の影をくたきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひのそらを世の中にかけて、かたぶく月のをしきのみかはとは京極黄門の歎息の詞

(一)「定案」あけは又秋の半も過ぎぬ

べし傾ぶく月の惜
しきのみかは一
心(二)浮御堂は僧惠
心の開創、その作
千體彌陀佛を安置
す

なるを、我はこよひ此堂にしもあそびて二たび惠心僧都の衣をうるはず。無常觀相の便ならずやといふに、あるじは、輿に乗じて來れる客を、なごさは興つきて歸さむやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

鎖あけて月さし入れよ浮御堂

やすくと出でていざよふ月の雲 (一葉集)

旅 賦

也 有

(一)天龍川の出水
によりて川どめに
なれる也

(二)宇津谷峠の名
物
(三)旅の賦、風俗
文選

春は乗かけの鈴なりて、浴衣染の花やかなるは、參宮の都道者か。夏は五月雨のかきたれて、金谷鳥田に大名の市をなし、秋は木曾路の木々も紅葉して、猿三聲の涙ひとり行脚の頭陀をうるはし、冬は鈴鹿の吹雪に飛脚の足を定めかねたる、いづれもとりふの哀なるべし。五十三次の紀行は、あまねく人の言ひ古せど、多くは歌よみ連歌師のぬめりに、小夜の中山に旅寝の詞をつかけ、宇津の山邊の蔦にまごはりて、十開子のさびしさは知らず。さらねば寺社舊跡の由來書、道の方角の詮義に落ちて、猶俳諧に拾ふべきものは残り。許六が賦に、馬方の境界を盡

(四)出女の説、
同上

し、木導が説に、出女の盛衰を述べたり。強ひてそのまねびせんとにはあらねど例の腹ふくるゝわざなればならし。旅の哀といへば西行の笠しめつけ、宗祇の草鞋の跡を思へど、大名の往來とても、たとへ煙草盆の銀金物はかゝやけど、竟日の駕籠に足をいたため、緞子の夜著に雨もりを聞くと、旅ならずしてはいかでかは。いでや本陣の夕暮は、たて砂に幕をひるがへし、すそする馬の尻をならべ、亭主が髪はそゝけながら、上下に泥足をすゝぎて、塗臺に小鯛のはね廻りたるは、さすがに草枕とは言ひがたるべし。下宿のさまは引劣りて、見せ先に居風呂ふすばり小ぐらき行灯の陰とり廻して、ねころぶものは、木枕に風をつぶし、まだ寝ぬ者は取かへ錢の勘定にのゝしる。人よぶ手拍子のならぬこそことにわびしけれ。月おち馬いなゝき、草鞋うり、焼酎うり、按摩けんびきの聲もをさまりて後、拍子木丁々として、これらはいかめしき旅の一體なり。すべて旅籠屋の庭の氣色は、蘇鐵つくり、松を植ゑぬはなし。畑畦には山水をしかけ、大磯小田原には小石をまきちらす。塀にしのびがへしはありながら大戸のかけがねはひずみてかゝらす。湯殿は無性にひろくて晝鼠を迷はし、雪隠の疊は座敷よりつらなりて、張付の裏梅もあらぬ匂ひに破れかゝり、蚤の啼くこそ哀なれ。膳にはいなだの鱒幽かに、鯉の

(五)箱根山中の小
驛

(六)丁稚小僧などの主人に無断にて伊勢参宮するもの

やき物、大根葉のあへ物、壺皿の豆腐にきざみ昆布の味も覺束なく、箸のふときはいく度もけづり直さんとにや、いどうるさし。田女を赤前垂とは、都にちかき名のみなるべし。宵は返辭の尻輕に立廻り、鼻歌に雨戸はしらかすも、今宵いかなるさゝやきの橋をかけたる契もどこそゆかしけれ。杳草鞋笠の頭甲は、ゆく先々の店にふるし、あやしのはなれ屋には、竹につけて道ばたにも出せり。赤表紙の道中記、おもりに鐵鑊をさげ、櫃のぼた餅にはすゝ黒き雜巾を覆ふ。箱根の赤腹は巻わらにさし、梅澤の鮫鱈は鍵にかけて軒につるす。されば日よりは天道次第ながら、さしも大井川は膝たけにこして、思はぬ酒匂に二日留められたる、荒井の茶屋の鰻のあたらしき日は親の精進にあたりて、ひしげたる小家に日越しの焼餅をくふなど、昨日は絹賣に道づれして、大濱に温飴をふるまはれ、今日はぬけ參の介抱して、天龍の川風に新らしき笠をどられたる、哀樂日々に移りかはりて、幸と不幸は首途の吉日にもよらぬなるべし。旅に哀を知るとは、その行客の身の上のみにあらず、駕かる人はかく人の達者を羨めども、駕かく人はかる人の錢をうらやむ。小揚の合言葉はいつの世よりの洒落ならん。やみげんことは三十五文にして、またと坂東とは二十八文なるべし。朝は鳥羽の早追にはしり、晩は姫路の女中をつりて、身は定

(七)大坂城の守護の爲に上下する武士

なきむらしぐれ、雲助のゆく未もいとこゝろもどなし。疝氣陰囊の川越の首に髭奴のまたがりて、及ばぬ富士をながめたるも、片目の馬かたの、座當のせくらがり峠こすも、いづれ世わたりの悲しからぬかは。それが中にも、口の過ぎたる船頭は大坂番にたゝかれ、鼻の落ちたる餅屋は六十六部にさへきたなまれぬ。誠に一生涯のありさま、觀すればみな旅にして、世を旅の空にたとへたるは、假の住居といふのみにあらず。樂みも苦しみも行く先に見盡して、たとへ女院の六道の沙汰とても、是に漏れざるべし。たゞ、俳諧師のなる果のみぞ、棄恩入無爲のしめしもまたず、ふつゝかにわたたま丸めて、吉野初瀬の春をゆかしみ、松島象潟の浪にうかれ廻り、三文ねざりて戻り馬にはぐれ、乗合なくてわたし舟も出さず、誰が爲ならぬ雨にもぬれ月にも道法をつもりちがへて、氣の毒の山かげに、一夜は一つ家の情をかりて、すゝき折たく圍爐裏はたに膝ざらあぶりながら、虫齒やむ子にまじなひ教へて、種團子のもてなしにあふ。あるはしるべの古寺を尋ねれば、和尚は漢和もすこしなりて、足のぬけたる碁盤になぐさみ、五六日の名残ををしまれて、松茸に喰あきたるなど、水雲萬里をうかれありきて、ほだしなき身の安さながら、その下人を孫平とは、我が伯母聲の名なるものをと、ふこ故郷の戀しき折もあるべし。われ仕官十

(八)建禮門院の六道の物語、平家加語にあり

年の間、木曾路東海道の線言ながら、のぶれば行程千四十里ばかり、猶ながらへて
いかばかりの旅行もしらねど、ことしは齡も四十の老ちかく、しきりに懷舊感慨の
情に忍びず。旅の賦一章を書きて寓居の筆をつひやすも、誠はあぢきなすすびなる
べし。(編衣)

四梅廬賦

李 由

恙を怖れたる時は、窩つらかなに住居し、氷の雨の用心とて、岩窟の所々に残りたる世もあ
るに、廂に孫庇をおろし、下側にしころをつけて、民の窟の賑ひけるこそめでたけ
れ。堅田の蟹の舟に年を重ね、乞食は橋の下に子を産むたぐひ、鶯の巢のやさしく、
鳥の巢のふつつかなる、皆おのれくが生得なり。ことしの秋、予ひとつの巢を營
む。燕の土をはこび、蟻の塔をくみて、四根の梅をたより、頰白の家をかゆるたぐひ
にはあらで、病鶏が埒に憑ひ、鳳凰の威をふるはんよりは、凡鳥の嘲りなからん
事を喜ぶ。山鳩が逸物の鷹と吹き上げらるゝも心ぐるしく、たゞ一日の閑鷗とおぼ
わて。眠る蝸牛の釜打破らんせせがまれては、又出て蜘蛛の部どのらめく。蛇の貝
の半造作、榮螺の蓋の戸もつらぬ住居ながら、風雅の友の入り亂れ、賓主がうま寄居虫の

(一)月令、「鳩化爲
鷹」
(二)童謡、「出々
虫々々々角出せ
出せ出されば釜わ
らう」

家をわすれて、例の夜鷹の寄合よと、はやされてたのしむのみ。(風俗文選)

百蟲譜

也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものゝ限なるべし。それも啼く音の愛なければ、
籠にくるしむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢も此物には託しけめ。
只蜻蛉のみこそ、かれにはや、並ぶらめど、糸につながれ繭にさゝれて、童のもと
あそびとなるだに苦しきを、阿呆の鼻毛につながるゝとは、いと口をしき諺かな。
美人の眉にたとへたる、蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかされてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我
子となす、老の行術をかゝらんとにもあらず、何を譲らむとてかくは骨折るや。我
に似よくとは、いかに己が身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂ずるとは詩人の
稱にして、歌にはさしも詠まず。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀な
る薬師堂に、大きなる巢作りて、掃除坊主をおびやかさんどす。それも針なくば人
には憎まれじを。

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風し

づまりて遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで、翁の目さましたれば、此物の事更にも
誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに啼きさかる比は、人
の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふ事をさかず、此物ばかり初蟬とい
はるゝこそ、大きな手がらなれ。やがて死ぬ氣色は見えずと、此のものゝ上は翁
の一句に盡きたりといふべし。

(二)車胤の故事

螢はたぐふべき物もなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすたく、五月の
闇はたゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者に取られて、油火の代
にせられたるは、此のものゝ本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、こ
との外の不自由なり。俳諧にはその真似すべからず。

日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露おく比なら
ん。つくづくぼうしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して
此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魂の雲に叫ぶにもおとるべから
ず。

(三)時鳥の異名、
時鳥は蜀の望帝の
生れがけりなりと
いふ傳説あり

蜘蛛はたくみに網をむすんで、ひそまつて物を害せんとす。待つくれの歌によまれ

(四)楚の雙舎蜘蛛
の網を見て仕官を
辭す

又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていとにくし。古代朝敵の始
として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に、
蟬の羽なごかけ捨てたるは、いさゝか哀そふ折もあらんか。彼はかひなくしく巢つ
くりてこそあれ、東海道にちりばひたる宿なし者をば、蜘蛛はいかでいふやらむ。
芋虫は腹たつものに譬へ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。脊虫各虫は名のみして
虫ならず。油むしといふは、虫にありて憎まれず、人にありて嫌はる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取虫は誰がために身をこがすや。蚌蚌ははかなき例に
ひかれ、蓼くふ虫は不物ずきの謗となれり。さば俳諧するものを、俳諧せぬ人のか
くいふ折もあるべし。

(五)淳于棼が夢に
見たる蟻の王國

おなじ寶の名によばれて、玉虫はやさしく黄金虫はいやし。
蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌
を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるも便あし
き方に穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべからず。

(六)木下長嘯子に
紙魚を憐む辭あり

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。
狗の齒に噛まるゝ蚤はたましくにして、猿の手にさぐらるゝ虱は、のがるゝ事難か

るべし。

虱を千手観音と呼ぶに、蝮げぢくは梶原といへり。さるは梶原が異名なりや、げぢくが異名なりや、先後今は知りがたし。

蝸牛は只水にあるべきものゝ、いかで草葉に遊ぶらん。家は持ちたれども、ゆく先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇蚯蚓の足なくてもあるべくは、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にも此類はあるべし。

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を、駕にのりて富士を詠めゆく人には似たり。

促織、鈴虫、くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松虫のその木にもよらで、いかでかく名を付けたるならん。毛生ひむくつけき虫にも、同じ名ありて、松を枯らし人にうとまる。一在所に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひとり殺生を事とす。これ松虫の類なるべし。

きりくすのつりさせとは、人のために夜寒ををしへ、藻にすむ虫は我からと、

只身の上をなげくらんを、蓑虫の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず。されど父のみ戀ひて、なごかは母を慕はざるらん。

蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の比端居めづらしき夕べ、はじめて仄かにきいたらむ、又は長月の比力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊屋釣りたる家のさま、蚊やり焼く里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり、藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團うまの隙なかりけむ。

むかし銀に執心のこせし住持は、蛇となりて錢箱をまとひ、花に愛著せし佐國は、蝶となりて園に遊ぶ。その俳諧に心とめし後の身、いかなる虫にかなるらん。花に狂ひ月にうかれて、更行く行燈の影をしたひ、なら茶の匂ひに、音を啼くらんこそ哀なるべけれ。(鶴衣)

百魚譜

也 有

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置ける、世の人の口における、己がさまぐなる物すきはあれども、此の魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。絲かけて臺にするたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土にはいかにしてか殊に賞

(一) 一休の狂歌と傳ふる歌、下の句は「小袖は紅梅花は三吉野」

(二) 莊子に伴朱漫屠龍の技を學び技成りて用ふる所なしと見たり
(三) 孔子の子、名を鯉といふ

(四) 鮪 (五) 晉の張翰秋風の起つを見て故郷の鮪魚膾を思ひ辭職して歸る
(六) 清盛熊野參詣の途中の事
(七) 紅葉鮪

鮪の沙汰も聞えず、是に乗りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞ是にこそ釣もたれ給へ。鮪を鱗うろこの司といふは、食味はなれたる理屈にして、さば是を料理せんと學びたる人は昔愚なる名をもこそごめたる。龍門瀧にのぼらんとする魚有りて、おほけなくも大聖の御子にも、此名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。かれは如何なる幸にかあらむ。味ひ美なりといへども、鯛の料理の品なるには似るべくもなし。乾物炙物にせず、鱈清汁によろしからず、くづし蒲鉾に用ひ難く、塩にも鮪にも調せず。只刺身あつ物にごままるは、多能を恥づといひけんを、中々譽と思へるにや。昔平家に悪七兵衛景清と名乗りて、今民間には泣く子をも威すべく、朝比奈辨慶にも肩をならべんとす。しかるに記録の上にしては、鯨しろうまの外はさせる働なくて、只二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかに世に名の事々しきぞと、ある人評したるものあり。かれたゞ七兵衛が類なるべし。

松江の名産、我朝にも品くたらず。張氏は是を秋風に思ひて仕途を辭し、平家は是を船中(四)に得て官路を進む。進退いづれをか羨むべき。

鮪は近江に洞庭の名をくらべたる、鯉(六)に似て位階おされり。名には紅葉をかざした(七)

れど鮪は春の賞翫となれり。

鮪は節饗の比もてはやされ、梅咲くころを世に匂ふ。

(八) 「空也」は「中元」の誤か

鮪は初秋に祝はれて、空也の蓮の葉に登るは、後生善處の契もたのものし。

鮪は芥子鮪の風味、上戸は千金にかへむとも思ふらむを、鎌倉の海の素性を兼好に言ひ探されたる、いと口をし。鮪節となりては、木の端のやうにも思はれず、その梢ども見えずして、花の名をさへ世に散らしぬる。

鮪は越路に名ありて、其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま〜鮪といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。

(九) 源氏物語の紫上は春を好み中宮は秋好中宮とて秋を好み也

鮪は越路に名ありて、其國の雪にも似ず、色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま〜鮪といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。

狭夜姫は石となり、山のいもは鰻となる。かれは有情の非常となり、これは非常の有情となれり。石となりて世に益なく、鰻となりて調法多し。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりと

も、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふもの世にもてはやさるゝは、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類と等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是いづれならんといふに、さればしろ菊ともしろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出でて、否とよ、世にしら猫ともしら鼠ともいふにこそと打込まれて、爰に物定の博士暫く默然たり。

鮎は鵜川の篝火に責られ、鯰は濁江の瓢箪におさへらる。比目魚は黒白に裏表をあらはし、海鼠は跡も先もなし。

齒にもたまらぬ鱧の骨は、何の爲に持ちたるや、それも海月のなきには勝れるか。こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ愚なれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、^(一〇)一休の口にはほめられながら、まさな法師の身の果かな。

かながしらといふ名のめでたくてぞ、産屋の祝儀にはつかはれ侍る。さるを石持といふものの、銀持ともいはし、世に如何ばかりもてなさむを、益なき名をもちて口をしどや思ふらん。

鱧、細魚はをさなき心地ぞする。大男の髭口をらして食ふべきとも覺ゆず。

(一〇)一休翁を好まれしこと一休咄に見ゆたり

鯨は、たゞ釣る比の面白きなり。里は砧に蚊屋しまひて、木曾に便よき人は、まだき新蕎麥喰ひたりなど、ほのめかされて、羨ましき比ならん。泥鰌は、酒の上に赤味噌はよく調じて、唐辛子くはへたるこそよけれ。白味噌がちなる大みや人は、いかに喰ふらんときへ覺束なし。鰻とは先名のふつゝかなり。いかで無比の美味をそなへて、あやしき毒を持ちたりけむ。その味ひと毒の世にすぐれたれば、くふ人を無分別ともいひ、くはぬ人を無分別ともいへり。

鯛といふものの味ひとに勝れたれども、崑山のもとに玉を礫にするとか、多きが故に賤しまる。たとへば田畠のこやしとなるども、頭は門を守りて天下の鬼を防ぐ。其功鰐鯨も及ぶべからず。

されば歌人は鳥蟲に四季をわかちて、魚に四時の題詠はなし。俳人兼ねて魚を品題とするは、もつばら味ひの賞翫を捨てざる故なり。しかれば歌よみは、耳目の愛にとどまりて、食は野卑なりとて取らざるに似たれど、かの喰ふべき若菜をもつばらによみて、菜の花のうつくしきを歌の沙汰に及ばぬは、喰はれぬ故によまざるにや、無下に口惜しと人の言ひたる、さがなき詞ながらをかしかりけり。(編衣)

(一一)續藏論「崑山之傍以玉瑛一抵三鳥鵲」

蓑蟲説

素堂

みのむし〜、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちよ〜となくは、孝に専らなるものか、いかに傳へて鬼の子なるらん。清女が筆のさがなしや。よし鬼なりとも瞽叟を父として舜あり、汝は蟲の舜ならんか。

みの蟲〜、聲のおぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松蟲は聲の美なるが爲に、籠中に花野をなき、桑子は絲を吐くにより、からうじて賤の手に死す。

みのむし〜、無能にして靜なるをあはれぶ。胡蝶は花にいそがしく、蜂は蜜をいとなむにより、往來れだやかならず、誰が爲にこれをあまくするや。

みのむし〜、かたちの少しきなるを憐ぶ。わづかに一滴を得れば、其身をうるほし、一葉を得れば、これがすみかとなれり。龍虵のいきほひあるも、おほくは人の爲に身をそこなふ。若かト汝がすこしきなるには。

蓑蟲々々、漁父が一絲をたづさへたるに同じ。漁父は魚をわすれず、風波にたへず、幾度かこれをときて、酒にあてんとする。太公すら文王を釣るの謗あり、子陵も漢王に一味の閑をさまたげらる。

(一)古今「雨によ
り田蓑の鳥をけふ
ゆけば名にはかく
れぬ物にぞありけ
る」

(二)遍照の故事、
大和物語に見ゆ

(三)定家「春雨の
ふりにし里を來て
見れば櫻の塵にす
がるみの蟲」

(四)寂蓮「契りけ
ん親の心も知らず
して秋風たのみみ
の蟲の聲」

みのむし〜、玉蟲ゆゑに袖ぬらしけん、田蓑の鳥の名にかくれずや。いけるも
の誰か此まごひなからん。鳥は見て高くあがり、魚は見て深く入る。遍照が蓑を
しぼりしもふるづまを猶わすれざる也。

蓑蟲々々、春は柳につきそめしより、櫻が塵にすがりて、定家の心を起し、秋は萩
ふく風に音をそへて、寂蓮に感をすゝむ。木がらしの後は、空蟬に身をならふや
骸も躬も共にすつるや。

又以三男文字二述三古風一

- 蓑蟲々々。 落入三臆中一。 一絲欲絶。 寸心共空。 似三寄居狀一。
- 無三蜘蛛工一。 白露甘レ口。 青苔粧レ躬。 從容侵レ雨。 飄然乘レ風。
- 栖鴉莫レ啄。 家童禁レ叢。 天許作レ隱。 我憐稱レ翁。 脱三蓑衣一去。
- 誰識三其終一。 (風俗文選)

嘲宵惑説

毛 純

秋の暮のあはれを知らぬ人は、入麵をこのみ、長雪隠をする人は、唐様の書をす
く。風雅のうつる、うつらざるの違ひなり。かの人生得燈を見ず、眠室にかきこ

(一)行脚僧

もり、寝る事を樂の最上とする、寢酒さめ、夢盡きて、ひたもの寢返れども、夜の明くるけしきもなく、屋普請の胸算用も仕あき、大國を領じ、治めんとれもへば、言下に治り、又は金持の浪人となりては、嵯峨の奥に引込み、斗藪頭陀に心を變じては、松島象潟に身をよす。されど繪に書ける色に心を動かし、獻立紙にすわりたる心地せられてやがて興盡きぬ。たまたま庚申の夜ありて、宵寝せぬ物とおごされ、大欠に懸金をはづし、田樂の焼くるを待ちかね、病人の夜伽に當つては、藥風爐に額を焦す。かゝる人たのしぶといふ事をしらす、琴碁書畫は屏風の模様とおぼね、花鳥風月は手本に書くさばかりしる。昔、宰予が晝寢も、夜ふかすわてに寐つらんかし。古人の燭をこるといへる、誠にゆるあり。人生七十今時はいきす。たごひ五十で死にたりとも、百年の算用にはたつべし。晝ありく鶴鴻は鷹につかまるれど、夜出づる情鷹は、網にかゝりても、やがていなさるゝを、たふとしとおぼねたり。(風俗文選)

長雪隠解

許 六

一藝の達人は、郷童に上座を許され、名字持ちたる人ご、座席の争ひをする。早

(二)李白春夜宴桃李園序「秉燭而夜遊」

(一)真經「きりぎりすなくや霜夜のさむしるに衣片敷きじとりかもれん朝市」
(二)文選「大隱隱朝市」

喰、早糞は男子の一藝とは稱じ侍る。此藝おほくは無風雅の人にあり。たごひ一藝はつきたりとも、一藝一徳ありて、萬徳一藝にはかゝがたからんか。されば甲斐の名將の分別所に定め、山といふ隠語を残し、森蘭丸が、きざみ鞘かぞへたるは、信長公も藝者と見たり。詩歌連俳の名句も、此の所より産出し、大悟十八度も、此室に入て工人を極めり。つくづく一とせのあはれを盡して、鳴くや霜夜の葦、薦の編目をもる月夜まで、人に心はつくめり。いにしへより朝市に隱家ありといへるは、慥に此の所の事なり。世務所用のいこまなき身も、しばらく閉關する時は、印纒を解きて、公役を許す。いそぎ閑居に入りて、跡を遠ざけ、半日の寂寞を樂まんと、尻をかゝげて走る。

何おもふ長雪院のしぶ團 (風俗文選)

藪醫者解

汝 村

世に藪醫者と號するは、もと名醫の稱にして今いふ下手の上にはあらず。いづれの御時にか、何がしの良醫、但州養父といふ所に隠れて、治療をほごし、死を起し生に回すものすくなからず。されば其風をしたひ、其業を習ふ輩、津々浦々

にはびこり、やぶとだにいへば、病家も信をまし、薬力も飛ぶがごとし。それよ
り物替り星移つて、今は長助も長庵となり、勘大夫は勘益となる。當時の藪達を
見るに、まづ門口に底抜の駕乗物をつるし、竹格子に賣薬の看板をかけて、文字の
紺青も、半は元げたり。たまさかの薬取を頼みて、薬店にはしらせ、物申は暖簾
の内に答へて、女房の顔をつゝむ。町役には牢舎を療じ、薬代にめでては、河原
者にのます。牛膝（一）には牛の膝を尋ね、鶴虱（二）は鶴のしらみをさがす。薬のみも次第
にかれて、胃の氣よわり、元氣衰へて、果は何がし村の道湯の明（三）をまつ。我が俳
諧の道をもてこれを押せば、師説もいまだとはからざるに、其手筋を失ひながら
宗匠めくをみるに、今はやらるゝ紗（四）綾ちりめんの、乗物の中におぼつかなく、緋
衣木蘭色のさどりの拂子（五）も、心許なけれど、佛法には薬毒の氣遣なければ、其分
なるべし。たゞ藪醫者のやぶはらに、又出る竹の子も、藪とならんこそうるさけ
れ。
（一）めのこづちといふ薬草
（二）あやしりといふ薬草
（三）あやしりといふ薬草
（四）あやしりといふ薬草
（五）あやしりといふ薬草

嵯峨にひとつのふる家侍る。そのはどりに柿の木四十本あり。五とせ六とせ経ぬ
れ。
（風俗文選）

落柿舎記

去 來

（一）晉書王祥傳、有母奈結實、母命守之、每風雨祥輒抱樹而泣

れど、このみを持ち來らず、代かゆるわざもきかねば、もし風雨に落されなば、
王祥が志にもはぢよ、もし鳶鳥にとられなば、天の帝のめぐみにもれんと、屋
敷もる人を、常はいごみのしりけり。ことし八月の末、かしこにいたりぬ。折
ふしみやこより、商人の來り、立木に買ひ求めんと、一貫文さし出し悦びかへり
ぬ。予は猶そこにどまりけるに、ころころと屋根はしる音、ひし／＼と庭につ
ぶるゝ聲、よすがら落ちもやます。明くれば商人の見舞來たり、梢つく／＼と打
詠め、我むかふ髪（一）の頃より、白髪生ふるまで、此事を業とし侍れど、かくばかり
落ちぬる柿を見ず。きのふの價、かへしくれたびてんやとわぶ。いと便なれば
ゆるしやりぬ。此者のかへりに、友だちの許へ消息送るとて、みづから落柿舎の
去來と書きはじめけり。

柿ぬしや木すゑはちかきあらし山
（風俗文選）

幻住菴記

芭 蕉

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ、そのかみ國分寺の名を傳ふな
るべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮たゞせ

給ふ。神體は彌陀の尊像とかや、唯一の家には、甚だ忌むなる事を、兩部光をや
 はらげ、利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、い
 とゞ神さび、物静なる傍に、住み捨てし草の戸あり。よもぎ根笹軒をかこみ、や
 ねもり壁落ちて、狐狸ふしごを得たり。幻住菴と云ふ。あるじの僧何がしは、勇
 士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老
 人の名をのみ残せり。予又市中をさること十年ばかりにして、五十年やちかき
 身は、養蟲のみのを失ひ。蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暮さ日に面をこがし、
 高すなであゆみくるしき北海の荒磯にさびすを破りて、今歳湖水の波にたゞよひ
 にはの浮巢のながれとままるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨きあらため、
 垣ね結ひそへなごして、卯月のはじめ、いとかり初に入りし山の、やがて出でし
 とさへ思ひそみぬ。さすが春の名残も遠からず、つゝと咲き残り、山藤松にかゝつ
 て時鳥しばし過ぐるほぞ、宿かし鳥の便さへあるを、木つゝきのつゝともい
 とはじなど、そゝろに興じて、魂、吳楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は
 未申にそばだち人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し、
 日枝の山比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり、橋あり、釣たる、船あ

(一) 四行、吉野山
 やがて出でじと思
 ふ身を花ちりなげ
 と人やまつらん
 拾玉集、誰か知る
 憂世なすて、柴の
 戸にやがて出でじ
 と思ふ身ぞとは

(二) 杜甫、昔聞洞
 庭水、今上岳陽樓
 吳楚東南拆、乾坤
 日夜浮

り。笠どりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗さる歌、螢飛びかふ夕闇の空に、水
 鶏のたゞく音、美景物としてたらずといふ事なし。中にも三上山は、士峯の傍に
 かよひて、武藏野のふるさすみかもおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さ
 んほが嶽、千丈か峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守
 るにぞとよみけん、萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと、後の峯に這ひ
 のぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて、猿の腰掛と名づけ、彼の海棠に巢を
 いとなび、主簿峯に庵を結べる、王翁徐佳が徒にはあらず。唯睡辟山民となりて、
 屏風に足をなげ出し、空山に風を捫つて坐す。たましく心まめなる時は、谷の清水
 を汲みて自炊ぐ、とくくの雫をわびて、一爐の備いとかろし。はたむかし住み
 けん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみおける物すきもなし。持佛一間を
 隔て、夜の物をさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧
 正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此のたゞ洛にのぼりいまそかりけるを、あ
 る人をして額を乞ふ。いとやすくと筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て
 草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、さる器たくはふべくもなし
 木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に懸けたり。晝はまれくとぶらふ人々

(三) 猿丸大夫の故
 跡あり

(四) 萬葉に網代守
 の歌なし

(五) 山谷集、徐老
 海棠集上、王翁主
 徐佳、海棠集注、徐
 佳、海棠集、徐佳、
 家、海棠集、徐佳、
 其、上、時、與、客、
 其、間、又、王、道、人、
 禪、歸、結、屋、於、主、
 峯、上、嘗、有、毛、人、
 其、間、問、道

(六) 王子瑞、門前
 剝啄定佳客、翁外
 屏顔皆好山

(七) 石林詩話、青
 山、捫、風、坐、黃、鳥、
 書、眼、一、黃、鳥、
 (八) 賀茂祠官藤木
 甲斐守敦直能書の
 名あり

(九)古文前集、野人載酒來、農談日夕

(一〇)莊子齊物論、罔兩問景曰、曩子行、今子止、曩子坐、今子起、何其無特操與

(一一)惠能禪師偈、吾三十而窺佛籬祖室

(一二)渡氏稚本「たぢよらん陸と頼みし稚かもと空しき床になりけりかも」

(一三)賀島落梧

に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入り來りて、ぬのしゝの稻くひあらし
兔の豆畑にかよふなど、我聞きしらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月
を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩(九)に是非をこらす。かくいへばとて、ひた
ぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさん(一〇)にはあらず。や、病身人に倦んで、世を
厭ひし人に似たり。つらく年月の移りこし、拙き身の料をおもふに、ある時は仕
官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室(一一)の扉に入らんせしむ、たよりのなき風
雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、しばらく生涯の計さへなれば、終に無能無
才にして、此の一筋につながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦せたり、賢
愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖(一二)ならずやと、れもひ捨て、ふしぬ。
まづたのむ稚の木もあり夏木立(一三) (風俗文選)

十八樓記

芭蕉

美濃の國ながら川にのぞみて水樓あり。あるじを賀島氏(一)といふ。稻葉山後に高く、
亂山左右にかさなりて、ちかよらず遠からず、田中の寺は、杉の一むらにかくれて、
岸にそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。曝布所々に引きはへて、右に渡し船
浮ぶ。里人行きかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝ、おのがさ
ましくも、たゞ此の樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日も忘るばかり、入
日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゝり火の影もや、ちかく、高欄のもと
に鶉飼するなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八つのながめ、
西湖の十の境も、涼風一味のうちにおもひためたり。もし此の樓に名をいはんと
ならば、十八樓(二)ともいはまほしきなり。

此のあたり目に見ゆるもの皆涼し (風俗文選)

芭蕉堂再興記

蕉村

四明山下の西南、一乗寺村に禪房あり。金福寺といふ。土人口稱して芭蕉庵と呼
ぶ。階前より翠微に入ること二十歩、一塊の丘あり。すなはち芭蕉庵の遺跡なり
とぞ。もとより閑寂を隱の地にして、綠苔や、百年の人跡をうづむといへども、幽
篁なほ一爐の茶煙をふくむが如し。水行き雲停り樹老い鳥睡りて、頻りに懐古の情
に堪へず。やうやく長安名利の境を離るゝといへども、ひたぶるに俗塵をいどふ
としもあらず。鶏犬の聲籬を隔て、樵牧の路門をめぐれり。豆腐賣る小家も近く、

(一)芭蕉「清瀧や浪にちりこむ青松葉」
 (二)同「六月や峰に雲おくあらし山」
 (三)同「風蕭る羽織や襟もつくるはす」
 (四)同「長嘯の墓もめぐるか鉢叩」
 (五)同「薦を着て誰人います花の春」
 (六)同「梅白し昨日や鶴をぬすまれし」
 (七)同「辛崎の松は花よりおぼろにて」
 (八)同「旅に病んで夢は枯野をかけた」

酒を沽ふ酈も遠きにあらず。されば詩人吟客の相往來して、半日の閑を食るたよ
 りもよく、飢をしのぐまうけも自在なるべし。抑いつの頃より、さは唱へ來りける
 にや、草かる童麥打つ女にま、芭蕉庵を問へば、必ずかしこを指す。むべ古き名な
 りけらし。さるを人其故をしらず。竊に聞く、いにしへ鐵舟といへる大徳、この寺
 に住みたまひけるに、別に一室を此ところに構へ、手自ら雪炊の貧をたのしみ、客
 を謝して深くかきこもりおはしける。蕉翁の句を聞いては泪うちこぼしつゝ、あ
 たふたと忘機逃禪の郷を得たりとて、常に口ずさみ給ひけるとぞ。其の比や蕉翁
 山城の東西に吟行して、清瀧の浪に眼裏の塵を洗ひ、嵐山の雲に代謝の時を感じ、
 或は丈山の夏衣に、薰風萬里の快哉を賦し、長嘯の古墳に、寒夜獨行の鉢叩を憐み
 あるは薦を着て誰人在すとうちうめかれしより、きのふや鶴を盗まれしと、孤山
 の風流を慕ひ、大日枝の麓に杖を曳いては、麻のためとに曉天の霞をはらひ、白河
 の山越して、湖水一望のうち、杜甫が背を決し、つひに唐崎の松臙々たるに、一世
 の妙境を極め給ひけん。されば都俳諧のたよりよければとて、折々此岩阿に憩ひ
 けるにや。さるを枯野の夢のあとなくなりたまひしものち、かの大徳ふかくなげき
 て、すなはち草堂を芭蕉庵と號け、なほ翁の風韻をしたひ、遺忘にそなへたまひけ

(九)蘇東坡に喜雨亭記あり

るなるべし。雨をよろこびて亭の名つくるなど、異くににも、さるためしは多かる
 とぞ。しかはあれど、此處にて蕉翁の口號なりと世に聞ゆるもあらず、ましてかい
 給へるもの、筆のかたみだになければ、いちじるしくあらそひはつべくも覺ね
 住侶松宗師の曰、さりや、うき我をさびしがらせよとわび申されたる閑古鳥のお
 ぼつかなきは、此山寺に入りおはしてのすさみなるよし、此頃まで世にありし耆老
 のふみのみちにも心かしてきが物がたりし侍りし。されば露霜のきわやらぬ墨の
 色めでたく、年月流れ去り、水くきの跡なごかのこらざるべき。さるを無功德の宗
 風と、ろ猛く、不立文字の見解まなきらめき御經聖典も捨てて長物とす。いか
 でさばかりのもの貯へ藏すべきなんぞ、いと騒々しき狂漢のためにいたづらに塵
 壺の底にくち、等閑に紙魚のやごりとほころびにけん。びんなきわざなりなど、
 かなしみ聞ゆ。よしやさば追ふべくもあらず。唯かかる尊き名の残りたるを、あい
 なく打ち捨ておかん事、罪さへおそろしく侍れば、やがて同志の人々をかたらひ、
 かくの如くの一草屋を再興して、ほごごぎす待つ卯月のはじめ、をトかなかく長月の
 末、必ず此寺に會して、翁の高風を仰ぐこと、はなりぬ。再興發起の魁首は自在庵
 道立子なり。道立子の太祖父坦庵先生は蕉翁のもろこしのふみ學びたまへける師

(一〇)伊藤坦庵

にておはしけるごぞ。されば道立子今此の擧にあづかり給ふも大かたならぬすく世のちぎりなりかし。(蕪村文集)

鹿島紀行

芭蕉

(一)貞享四年八月

(二)宗波

洛の貞室、須磨の浦の月見に行きて、松かげや月は三五夜中納言といひけん、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此の秋、鹿島の月見んと、おもひ立つ事あり。伴なふ人ふたり、ひとり浪客の士、ひとりは水雲の僧、僧はからすの如くなる墨の衣に、三衣の袋をわり打掛け、出山の尊像を、厨子にあがめ入れて、背中にせおふ。杖杖曳きならして、無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出でぬ。今ひとり僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、鳥なき鳥にも渡りぬべくて、門より船に乗りて、行徳といふ所に至る。船をあがれば、馬にもあらず、細腰のちからためさんと、歩行よりぞ行く。甲斐國よりある人の得させたる檜木もてつくれる笠を、おのゝいたゞきよそひて、やはたといふ里をすぐれば、かまがいの原といふ廣き野あり。秦旬の千里とかや、目もはるかに見わたさるゝ。つくば山むかふに高く、二峯ならび立てり。かの唐土の雙劍の

(三)明録、秦旬之
一千餘里、陳々水
舖、漢家三十六宮
澄々粉飾

(四)無名抄に橋爲
仲陸奥の守の任は
て、歸る時長櫃十
二合に萩を入れて
もち上れりといひ

(五)白氏、「朝倉汎
鶴費杯盤、夜宿腥
臊汚牀席」

(六)佛頂禪師

(七)杜甫「欲覺聞
晨鐘、令人深發省」

峯ありと聞はしは、廬山の一隅なり。雪は申さずまづ紫のつくばかなとは、我門人嵐雪が句なりのすべて此山は、日本武尊の言葉をつたへて、連歌する人の、はじめにも名づけたり。和歌なくはあはれならず、句なくは過ぐべからず、誠に愛すべき山の姿なりけらし。萩は錦を地に敷けらんやうにて、爲仲が長櫃に折り入れて、都の土産に持せたるも、風流にくからず。さちかう、をみなへし、かるかや、尾花みだれ合ひて小男鹿のつま戀ふ聲、いとあはれなり。野の駒、所得がほにむれありく、又あはれ也。日すでに暮れかゝる程に、利根川のほとり、布佐といふ所につく。此の川にて鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐ者あり。宵の程、その漁家に入りてやすらふ。夜の宿醒し。月くまなく晴れけるまゝに、夜船さしくだして鹿島に至る。晝より雨しきりに降りて、見らるべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、いまは世をのがれて、此の所におはしけるといふを聞きて、尋ね入りてふしぬ。すこぶる人をして、深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いささか晴れぬるを、和尚おぼろかし給ふれば、人々おぼろき出ぬ。月の光、雨の音、たゞあはれなるけしきのみ、むねにみちて、いふべき言の葉もなし。はるくくと月見に來たるかひなきこそ本意なきわざなれ

(八)清少納言をさす

ど、かの何がしの女すら、時鳥の歌、ねよまでかへりわづらひしき、我ためにはよき荷擔(八)の人ならんかし。

月はやし梢は雨を持ちながら

雨に寐て竹おきかへる月見哉

曾 翁

良

(風俗文選)

宇治行

燕 村

(一)宇治拾遺物語に不淨說法する法師は平茸に生るとあり

宇治山の南、田原の里の山ふかく、茸狩し侍りけるに、若きごちは、ねものを貪り先を争ひ、余ははるかに後れて、こゝろ静かにくまぐさがしもとめけるに、菅の小笠ばかりなる松茸五本を得たり。あなめざましい、かに宇治大納言隆國の卿は、ひらたけのあやしきさはかいとめ給ひて、なご松茸のめでたきことは、もらし給ひけるにや。

君見よや拾遺の茸の露五本

最高頂上に人家見えて高尾村といふ。汲鮎を業として世わたるたよりとなすよし茅屋雲に架し斷橋水に臨む。かゝる絶地にもすむ人有りやと、そゝろに客魂を冷やす。

(二)白樂天、琵琶行にある詩句

鮎落ちていよく高き尾上かな

米がしといへるは、宇治第一の急灘にして、水石相戦ひ奔波激浪雪の飛ぶが如く、雲のめぐるに似たり。聲山谷に響いて人語を亂る。銀瓶乍破水漿迸、鐵騎突出刀鎗鳴、四絃一聲如裂帛、白居易が琵琶の妙音を比喻せる絶唱をおもひ出でて帛を裂く琵琶の流や秋の聲 (蕪村文集)

遠千鳥序

鬼 貫

(一)清輔袋草子、「鶯よなどさは啼くぞちやほしき小鍋やほしき母や戀しき」
(二)鬼貫「文も見ぬしぐれふる夜ぞ定めなき」

時は逢ひがたく失ひやすし。茲に來山といひし人、俳道に其の名高く、世もて其の風をしたはずといふことなし。予若かりし頃より、したしく相かたらひ侍りける。昔、螢雪の窓を敲いて、鶯にはあらねど、小鍋やほしきと、手づから恵み來りし。其の名を小西と呼びていまそかり、鍋の命はつきなかりしを、去年の時雨月の初、定めなき數に入りぬ。其の頃句に悼みてつかうまつりし。我袖のきはづきも變らざるに、早一回りのけふに向ふ。

むかしおもふしぐれ降る夜の鍋の音

(三)陳師道は宋の高士なり后山と號す詩文を以て稱せらる

(一)渡邊吾仲、京六條ニト居す

(二)月の大小に従ひかけがふるよりいふ

生前の風流は木の葉駒にくはしくのすれば、更にもいはじ。彼の翁天性酒を愛すと雖ども、終に親疎青白の眼をわかつた。しばし沈酔の中にも俳諧を諷ふ事、恐らくは一斗百篇の詩を恥ぢずといふべし。世の人十萬堂と稱美せり。其の美をしたひ其の徳をあふく食客門人、筆をして盡しがたし。それが中に鳥路齋文十、ひとり節を守り志の高き事、彼の陳后山も麓なるべし。よて遠千鳥を編して、いさゝか師恩を酬いんとす。これが序を乞ふにいなみがたく、享保かのどの酉、初冬の日、權花翁おにつら筆をとるものならし。(な、くるま)

宴柳後園一序

支考

世にあそぶ人ありて、綾羅錦繡にたのしむ時は、樂つきて後たのしむものなし、山林樹下にあそぶものは、心にみたざれば、世にうらやむかたも出きぬべし。此のふたつのさかひに居らざるものを、心に天遊ありとぞ、むかしの人もいへりける。されば柳後園の何がし、三四の友達ありて、遊ぶ事日あらず。額には閑の一字を題して、しづかならぬ時は横になし、やかましき時はさかさまに置きて、其時の心に随ひ行くは、大小の額見る心にや、侍りけん、此の日東花坊も、此の中

(三)李白「如詩不成、罰依金谷酒斗」

にあそびて、人々酒のまんと催したるに心に物をとめ、口に餘情をいふ人ならば、罰は金谷の酒もをしからん。俳諧に案じ入りたる時は、こよりといふものして、くさめさせむとぞたはぶれける。(風俗文選)

銀河序

芭蕉

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡が島は、海の面十八里滄波を隔て、東西三十五里に、よこをりふしたり。みねの嶮難谷の隅々まで、さすがに手にとるばかり、あざやかに見わたさる。むべ此島は、こがねおほく出てあまねく世の寶となれば、限りなき目出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞のあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて、暫時の旅愁をいたはらんとするほど、日既に海に沈んで、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と冴わたるに、沖のかたより、波の音しば／＼はこびて、たましひけづるがごとく、腸ちぎれて、そゝろにかなしびきたれば、草の枕も定らず、墨の袂なにゆるぎはなくて、しぼるばかりになん侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川

(風俗文選)

鼻 箴

也 有

(一)「なつかしき色とはなしに何に此未摘花を袖にふれけむ一源氏が常陸宮の姫君の鼻の赤きなかちてよめる歌

(二)論語、「非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動」

しのぶの浦の見る目はもとより、耳とも口ともつゞけたらむ。歌にもさのみけやけからず。如何なれば鼻といふ名の、ひとへに俳諧にはどゞまりぬらむ。末摘花のわる口も、あからさまには詠みなし給はず、そのおかしみこそ俳諧には嬉しけれ。さりさて臍の尻のどて、いやしむ類の物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は、神代一番の見事さにて、愛宕高雄の天狗達も、自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間露霜のおきごころなくていかに寒からむ。見よや、人の老いゆけば、目は遠山の霞棚引き耳には鳥蟲の聲もうごく、口は冬がれの齒も落ちて、盛衰まのあたり悲みを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず、つゞれて用をかく事もなし。ひとり常磐の操を守りて、時しらぬ山とも稱すべけむ。されば恐るべき人心、むかし聖賢のをしへにも、視聽言動の四つばかりをあけて、鼻に警ゆるがせなるより、世に傲のきざし起りて、寵にはこる妾小姓の、おほくは主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出でぬる。わならぬかをりにひかれよる、色のいましめは尙更にして、女

のよれる髪筋には、鼻の高き大象もつながれ、あほうの延ばせる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝ例、わざはひ蕭牆より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。(編衣)

嵐蘭詩

芭 蕉

(一)中庸「狂金革死而不厭、北方之強也」
(二)論語、雍也、「質勝文則野、文勝質則史。文質彬彬、然後君子」

金革を褥にして、あへてたゆまざるは士の志也、文質偏ならざるをもて、君子のいさをしとす。松倉嵐蘭は、義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事、十とせあまり九とせにや。此二とせばかり、官を辭して岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷なひ、稚子をほだしとして、いまだ世波にただよふ。されども榮辱の間に居らず、日々風雲に坐して、今年仲の秋中の三日、由井、金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳き、其の歸るさより、心地なやましようして、終に息絶ぬぬ。同じき二十七日の夜の事にや、七十年の母に先だち、七歳の稚子におもひを残す。いまだをしむべき齡の五十にだにたらず、公の爲には、腹おしきりても悔ゆまじきうつはものゝ、はかなき秋風に吹きしをれたる草の袂、いかに露けくも、口をしくもあるべき。今は

(三)晉書王戎傳に
裴戎王戎の目を見
て戎眼爛々如嚴下
電といへり

の時の心さへ知られて悲しきに、老母の恨、はらからのなげき、親しきかぎりは聞き傳へて、偏に親族の別にひとし。過ぎつる睦月ばかりに、稚子が手をとりて予が草庵に來り、かれに號得さすべきよしを乞ふ。王戎五歳の眼ざしうるはしと戎の一字を摘んで、嵐戎と名づく。其よろこべる色、今日のあたりを去らず。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はしのばるる習ひ、まして父のごとく、子のごとく、手の如く、足の如く、年頃いひなれむつびたる佛の、愁の袂にむすばはれて、枕も浮きぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがりて、たゞおしまづきにかゝりて夕の雲ににむかふのみ。

秋風に折れてかなしき桑の杖 (風俗文選)

俳諧發願文

浪 化

(二)天上、人間、
餓鬼、畜生、修羅、
地獄

人死して六道に生れ、からき目見んは、ひとへに娑婆の業因によれりけるごかや世に立花すく人は、たて、は崩し、くづして又たて、終日大汗ながし、霞のさきに枇杷の葉つけて、馬の耳のおもひをなし、屈曲を好みて、鐵釘に打ちつけ、針がねにしばりかがめて、見る目もくるしかるべし。わづか五寸の瓶に、千山萬水

の思ひをこめんも、猶々氣づまりならんかし。もし立花せんごならば、曾根の松を心に立てて、ながしに清見寺の梅ならば、少しは心のびやかなる風情も有るべし。されど一時の榮花も盡きて、まづ椿ころりと落ちて、無常をしめし、木樅一日の榮をさとりて、程なくしぼる、例の心短きにや、やがてぬき捨て、果は烟ご立ち登る。それさへあるを、暮うつ人は、赤目引きつり、喰物時をわすれ、終夜同じ事竝べたらんは、飽かずやあらん、よき手あしき手とて、一座打ちこぞり、案じふくれ、墓石の限り蒔き盡す時、何のをし氣もなく打崩したるは、さりとては殘多き事なるべし。さしも手間入れて案じたらんは、せめて五日十日もながめよかし。此人死たらん後は、必ずさるの河原に生れて、父母戀しがる子供に立ちまじはり地藏おぼさつの御衣の下にかくれ、あけくれ同じ事すらんも、又あはれなるべし若一枝さして諸佛に奉り、一目投げてはあみだぶ唱へたらん人は、うたがひなく西方に生れて、百味の外の飯食には、なら茶、蕎麥切はくひ次第たるべし。今吾はいかいの結縁は、狂言綺語のふるみにおとし、百韻千句の數を合せて、一座の廻向は、あみだぶくと申して仕舞ひ侍りける。

弔古戰場文

芭蕉

(一) 清衡、基衡、秀衡
 三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は、一里こなたにあり、秀衡が跡は、田野になりて、金鷄山のみ形を残す。まづ高館にのぼれば、北上川は南部より流るる大河なり、衣川は泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。康衡等が舊跡は、衣が關を隔てて、南部口をさしかため、ねびすをふせぐと見たり。扱も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れては山河あり、城春にしては草青みたりと、笠打鋪きて時うつるまで涙を落して侍りぬ。

夏草や兵ごもがゆめのあと (風俗文選)

東順傳

芭蕉

(二) 竹下の略
 老人東順は、榎氏にして、其祖父江州堅田の農士、竹氏と稱す。榎氏といふものは、晉子が母方によるものならし。ことし七十歳ふたごせの秋の月を、やめる枕の上に詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のはごりまで、神みだれず、終に更科の句をかたみとして、大乘妙典の臺に隠る。若かりし時、醫を學ん

しに東順答へて、
 「子と姨とたがへて見ん今日の月」
 (四) 釜中魚を生じて飯中塵を生ずとて米なきをいふ

で、恒の産とし、本多何某の公より、俸錢を得て、釜魚飯塵の愁すくなし。されども、世路をいとひて、名聞の衣をやぶり、杖を折いて業を捨て、既に六十年のはじめ也。市店を山居にかへて、樂む處筆をはなさず、机をさらぬ事十とせあまら、其筆のすさみ、車にこぼるゝがごとし。湖上に生れて、東野に終りをとる、是かならず大隱朝市の人なるべし。

入る月のあとは机の四隅かな (風俗文選)

物忘翁傳

也 有

わすれ草生ふる住吉のあたりに住みわびたる、物忘の翁あり。さるは健忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覺の疎かなるにぞありける。昔は經學の道をもとひ聞き、作文和歌の席などにも、誘ふ人あれば交らひけれど、さく事習ふ事のさすがに面白しと思ふ物から、夕べに覺わしことごとくも、朝ぼらけには漕ぎ行く舟の跡なくて、身にも心にもこの事すくなし。さればこれを書付け置かむと、しひて硯ならし机によれば、春の日は蝶鳥に心浮かれて過ぎ、秋の夜は虫なきといとねふたし。かくてぞ老曾の森の草、かりそめの人の約束も、

(一)伊勢物語「行く永に数かくよりもばかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

(二)永縁僧正「きく度に珍らしければ時鳥いづも初音の心地こそすれ」

(三)都隆

(四)新古今集「忘れてはうちなげかる夕かな我がみか知りてすぐる月日を」

小指を結び手のひらにしるしても、行水の數かくはかなさ、人もわらひても罪ゆるしつべし。されば翁のいへりける、身のとり所なきを思ふに、若きに數まへられしほどは、人やりならず恥かしかりしが、つんぼうの雷にさわがず、座頭の蛇におごろかざる、こぼれ幸なきにもあらず、よのつね聞きわたる茶のみがたりも、はじめ聞ける事の耳にのこらねば、世に板がへしといふ咄ありて、またかの例の大坂陣かど、若き人々はつきじろひて小便にも立つが中にも、我は何がし僧正の時鳥ならねど、きく度にめづらしければ、げにと聞くかひある翁かなど、語る人は心ゆきても思ふべし。ましてつね々手馴れ古せし文章物語の双紙も、去年見しことはことし覺えず、春よみし書は秋たごとくしく、又もくりかへし見る時は、只新なる文にむかふ心地して、わかず幾度も面白ければ、わづかに兩三帙の書籍ありて、心の樂さらに盡くる事なし、むかし炎天に腹をさらしたる男は、人にも折々物をどはれて、とりまがはし言ひたるべしと、いかにかしましき心かしけん、今は中々うれしき物わすれかな、とぞ言ひける。猶かの翁が家の集に、何の本歌をか取けるならむ。

わすれてはうちなげかる夕べかなど

物覺によき人はよみしか (鶉衣)

妖物論

也 有

世に妖物といふ物ありて、おほくは女となり兒とあらはれ、大坊主の取沙汰はきけど、月代そりたるはつひに聞かず。夜ばかり出づるはいかなるゆゑぞと、或人の問ひたるに、晝は例の子供のたかりて煩はしさにと答へたるぞ、さしあたりての名言なるべき。臆病者を相手にとれば、その藝ことに出来榮して、武功の人に^(一)出あはすれば、思ひの外のあやまちをかうむる。鬼は伯母に化けて腕をとりかへし、狐は叔父にばけて毘の異見をいふ。誠に鬼が伯藏主になり、狐が伯母に化けたらんは、その姿をかしからし。これらや正風自然の本姿なるべきをや。まづは狐狸のなすわざに落ちて、猫また河童はたまの沙汰なれども、その正體の穿鑿は、樂屋の見ねておもしろからず。たゞ理屈なき妖物といふものこそ、ここにゆかしけれ。そもく神は湯立にもうつらせ給ひ、佛は稱名に來迎なるを、此の妖物は百物語に感應して、何とさだまれる姿なければ、三才圖會にもせられず、訓蒙圖彙の筆にも及ばず、たゞ赤表紙の小双紙にはづかしき姿はとめられける。

(一)狂言「こんくわい」

(二) 關守は關寺
か
(三) 蘇東坡に九相
詩あり美人の死後
の姿を九段にわけ
て詩に詠す

さるに、昔今の美婦國色すら、身の終はみぐるしく、關守におちぶれ、檜垣にさ
まよひ、又は猿澤の池の藻屑にまごはれ、馬嵬が原の草葉にさらされて、果は東坡
が九相の見たてもうるさきに、たゞこの物の終ばかり、引幕の陰をもたのます、
あごに箒も雑巾もいらす、かきけすやうに失せにけるこそ、いふばかりなくめで
たけれ。(鶴衣)

手足辯

汝村

甲冑のよろひかぶとをあやまり、行燈挑灯をとりちがへたるは、むかしより國中
みな誤り覺ければ、却つてあらためたる人を、あやまりといふも理ならん。こゝ
に一身の中、足を賤しとし、手を貴しと定め置きたるは、いづれか賤しとし、いづ
れかたふとしとせんや。賤しとて終に斬り捨てたる人もきかざれば、持にこそ定め
置きたけれ。それ足は行歩を産として、外の用をしらず。杳、木履をかけ、草履わ
らちをはきて、直に土をふまず、居る時は、足袋、鞆に包みまはし、歩みつかれるば
馬、駕籠に抜け乗せられ、千山萬水の間に坐して風情に嘯く。手は一身の奴にし
て、定めたる産なし。頭の虱を捫り、跟のあかぎれを撫づる、至らざる所なく、又

なさすと云ふ事なし。是いやしき事の第一なるべし。貴人高家の傍に、侍女小姓の
つとめあれど、厠の役ある事を聞かず。されば我が脚にて、他の鼻端の塵を拂は
ば、人怒つて我を罪せん。人また我頭の蠅を、足にて追はど、我をたふとしと
おもへど、世の人我に代つて、にくみのしり、怒をうつして、我を阿方と號す
るこそ、おほきなる僭上なれ。其の僭上人、蒲團、簞に臥して、休する時も、必
す足を伸すを一番とす。湯にも入る人も、足からならでは這入りがたし。向後足
にあたらしみをつけて、手を古風のふるみにおとさん。但し徳利子は、各別の沙
汰なるべし。(風俗文選)

嘲佛骨表

(古文傳類、准下讀三孟嘗君傳一之例上)

其角

むかし韓退之、表を奉つて佛骨を嘲る。今我これを讀んで、退之をあざける。人
死して骨となり、骨朽ちて土とかはる。佛骨何の王位をけがさん、佛骨もし人を
穢さば、禽獸の皮骨は、猶人をけがすべし。人は天地の靈にして、禽獸人に及ば
ず、夫束帯のかざりには象牙をたふとび、珍簞の鋪物には、虎豹の皮にふす。鼈
甲は笄につくり、尾毛は筆の用にぬかる。鹿茸、牛角、鯨の髭のたぐひ、宮室を

(一) 憲宗佛骨を宮
中に迎ふ

(二)足疾鬼佛牙を盗みし故事

飾り、器物を造る。たゞきしひし臨しは、なめて口中を潤し、雉子の胴殻、燕骨は、嚙んで直に腹中にはしる。退之佛骨をいやしとし、禽獸をたふとしとするは何の謂ぞや。若し佛骨細工のたすけにもならずといはゞ、はやく疾鬼にあたへて、錢かねとせざる、假令、拂底の鬼なりとも、虎の革の犢鼻褌は取るべしと、かれが淺見を嘲つてしかいふのみ。

しばらくは蠅を打ちけり韓退之 (風俗文選)

翁の賛

蕪村

(一)張九齡は唐の人、玄宗に千秋金鑑録を奉り、後致仕す
(二)丈山「わたらじな」の老の涙そふ影もはづかし
(三)近衛龍山公「宗鑑が姿を見よやがきつばた」ま
隆「手にもてる姿
た「見ればがきつ
た「とありがきつ
(四)日野資朝の放
事徒然草に見ゆ

張九齡は明鏡の裏に白髪を憐み、丈山は清き流に老の面影を恥づ。こゝにひとり(三)の隠士あり。いづれのところの人といふことをしらず、常に葛てふものをたしめば、人呼んで葛の翁といふ。もごより青雲權貴の地をいとひて、龍山公の御前に侍らざれば、れのづからかきつばたの秀句を遁れ、資朝の卿に逢ひ奉らざれば、むく犬のそしりもなし。只生前の一杯の葛水、身後の榮聲にかへなまし。されば清濁明晦のさかひ、是不是いづれぞや。しかしきよからんよりは寧ろ濁らんには、明らかならんよりは、はた、くらからんには、

葛水や鏡に息のかゝる時

葛水に見る影もなき翁かな

此意を了解したるものは誰、

その日くらしの翁あり、このことをのぶるものは誰、夜半亭蕪村なり。(蕪村文集)

奈良團賛

也 有

青によし奈良の帝の御時、いかなる寂慮にあづかりてか、此の地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其の道の藝くはしからば、多能はなくてもあらし。かれよ、かしくも風を生ずるの外は、たわて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれて、公界にへつらふねぢけ心もなし。たゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは、桐の箱の家をも求めず、ひさごがもとの夕すゞみ晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず、物置の片隅に紙屑籠と相住して、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はたか身の寐姿を、あなかしこ、人にかたる事なかれ。

袴著る日はやすまする團かな

(鶴衣)

おらが春

一

茶

牡丹

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたりて、云ひつぎ聞き傳へて、界限は更なり、よそ國の人も足を勞して、わざ／＼見に来る者日々多かりき。おのれも今日通りがけに立寄り侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらへ、雨覆ひの蔀など今様めかして凜々しく、白、紅、紫、花のさま隙間もなく開き揃ひたり其の中に黒と黄なるは、云ひしに違はず、目を驚かすほど、珍らしく妙なるが、心を静めて再び花の有様を思ふに、婆婆々々として何となく見すばらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りの手翳女の側に、むなしき屍を粧ひ立て並べ置きたるやうにて、さら／＼色艶なし。是れ主人のわざくれに、紙もて作りて、葉がくれにく／＼りつけて、人を化かすにぞありける。されど腰掛台の價を食るためにもあらで、たゞ日々の群集に酒茶費して楽しむ主の心思ひやられて、しきりにをかしくなん。

紙屑も牡丹顔ぞよ葉がくれに

(おらが春)

露の世

楽しみ極りて愁ひ起るは浮世の慣ひなれど、いまだ楽しみ半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなるみどり子を、寐耳に水の押し来る如き、あらくしき痘の神に見込まれつゝ、いま水膿のさなかなれば、やをら咲ける初花の、泥雨にしはれたるに等しく、側に見る目さへ苦しげにぞありける。これも二三日経たれば痘はかせぐちにて、雪解の峽、土のほろ／＼落つるやうに、瘡蓋といふもの取れば祝ひ囃して、さんだら法師といふを作りて、笹湯浴びせる真似かたして、神は送り出したれど、ますます弱りて、きのふより今日は頼み少なく、終に六月二十一日の朝顔の花と共に、此の世をしほみぬ。母は死顔にすがりて、よ／＼と泣くもむべなるかな。この朝に及んでは行く水の再び歸らず、散る花の梢に戻らぬ悔ひごとなど、あきらめ顔しても、思ひきりがたきは恩愛のきづなよりけり。

露の世は露の世ながらさりながら

(おらが春)

年の暮

他力信心くごと、一向に他力に力を入れて頼み込み候輩は、遂に他力繩に縛られて自力地獄の焰の中へはたとど陥り候。其の次に、かゝるきたなき士凡夫を、うつくしき黄金の膚になし下されど、阿彌陀佛に押し誂へに誂へばなしにしておいて、はや五體は佛染みなりたるやうに、わる濟ましなるも、自力の張本人たるべく候。問ひて曰く、如何やうに心得たらんには御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く、唯だ自力他力なんのかのいふ、あくたもくたを、さらりと、ちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第、遊ばされ下さりませと、御頼み申すばかりなり。斯くの如く決定しての上には、南無阿彌陀佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に、手長鰻の行ひして人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、わが田へ水を引く盗み心をゆめく持つべからず。然る時はあながち作り聲して念佛申すに及ばず。願はずとも佛は守りたまふべし。是れ即ち當流に安心とは申すなり。穴かしこ。

ともかくもあなたまかせの年の暮 (おらが春)

笈の小文

芭蕉

發端

百骸九竅の中に物あり。かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすもの、風に破れやすからん事をいふにやあらん、狂句を好む事久し。終に生涯のはかりごとゝなす。或時は倦て放擲せん事を思ひ、或時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかうて、是が爲に身安からず。しばらく身を立てむ事をねがへどもこれが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らむ事を思へども是が爲に破られ、終に無能無藝にして、只此一筋に繋がる。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶にねける、其の貫通する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る所花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。像、花にあらざる時は、夷狄にひとし。心、月にあらざる時は、鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

(一)貞享四年

旅人と我名呼ばれんはつしぐれ

又山茶花をやどくにして

岩城の住、長太郎といふもの、此脇を付けて、其角亭において關送りせんと、もて

なす。

時は冬よし野をこめん旅のつと

此句は露沾公より下し侍りけるを、はなむけの初として、舊友の親疎門人等あるは詩歌文章もて訪ひ、或は草鞋の料を包んで志を見す。かの三月の糧を集むるに力を入れず。紙布綿子などいふもの、帽子したうづやうのもの、心々に送りつとひて霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし草庵に酒肴携来りて行方を祝ひ、名残を、しみなどすること、ゆゑある人の首途するにも似たりと、物めかしく覺わられけれ。
(卯辰紀行)

奥の細道

芭蕉

發端

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も亦旅人なり。舟のうへに生涯をうかべ馬の口(二)とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖すまとす。古人も多く旅に死せるあり、予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず、海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひてや、年も暮れ、春立てる霞の空

(二) 莊子逍遙遊
「適千里者三月聚糧」

(一) 李白「夫天地者萬物之逆旅也、光陰者百代之過客也」

(二) 採茶庵

に、白川の關越ゆんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、もゝひきの破れをつゞり笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に譲り杉風が別墅に移る

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

おもて八句を庵の柱にかけおき、彌生も末の七日明ばの、空臙々として、月は有明にて、光をさまれるものから不二の峯幽にみわた、上野谷中の花の梢、又いつかはと心細し。むつまじきかぎりは宵よりつとひて、舟にのりて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の泪をそぐ。

行く春や鳥は啼き魚の目は泪

これを矢立の初めとして、行く道なほすゝまず。人々は途中に立並びて後影の見ゆる迄はと見送るなるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思立ちて、吳天に白髪を恨を重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬ境、もし生きてかへらばと、定めなきたのみの末をかけ、其の日漸く早加といふ宿にたどり着きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出立ち侍る

(三) 陶淵明「羈鳥戀舊林、池魚思故淵」

を紙子一重は夜のふせぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたき銭などしたるは、さすがに打捨てがたくて路次のわづらひとなれるこそわりなけれ。
(奥の細道)

臍頌

也 有

臍を不用の物なりとは、我も誇りし人の數なり。されば他の一寸は見えて、わが一尺は見えずとか、世に役なきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれどもかの臍は物やは食ふ、素餐の誇もなし。さらば物やはいふ、三絨の警にも及ばず。わが世にありて物を費すには似るべからず。人の支體に不用を論せば、男の乳ばかりこそ、如何なる益のあるとも見ねど、今更これらをとる拂はば、腹は渾沌王の面影して、世にすげなきものなるべし。いでかの臍は頓死急症のせん方なきにも、先とて是に灸する時は、泉下の首途を留むるためしも多し。扱こそ腹のさしも草、只たのめどもよみ給ひける。たどへ項羽が山を抜く力も、此の垢を取れば忽に落つとぞ。痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我が朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり。しかるにつまじき隠居ありて、臍金といふを溜

(一)周廣、金人の口に三絨して「古之慎言人也」と銘ありじ由孔子家語に見ゆ

(二)莊子に南海の帝を僦といひ北海の帝を忽といひ、中央の帝を渾沌といふ渾沌は耳目口鼻すべてなき由見ゆ

(三)芭蕉「故郷や臍の緒に泣く年の暮」

められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、いかで是抓つかまむとし給ふより、女小童の氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこねたり。むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣く年の暮と、懷舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばし鼻も及ばず。かれはかく風雅にも大功あれば、今は我が身を何にたとへん。されば臍はわが下に立たむ事かたぐとも、われも又臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず。かれに倣はむとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、しかれば上下の品定めはやめて、けふより只彼をそしるまじとぞ。

友とせむ臍物いはば秋の暮 (鞆衣)

俳諧文選

(終)

附 録

一 俳句選

元朝の見るものにせん富士の山

春寒きとし

にがくしいつまで嵐ふきのたう

手をついて歌申上ぐる蛙かな

月に柄をさしたらばよき團扇かな

摺小木に知らすな蓼の花ざかり

田に虫の多くつける年

大王の國もおそれぬ田虫かな

風寒し破れ障子の神無月

かくふるにいづくへとてか雪佛

元朝や神代の事も思はるゝ

宗 鑑

同 同 同 同

同 同 同 同

武

宗因「やがて見よ
棒くらはせん蕎麥
の花」

衣通姫「わがせこ
がくべき宵なり
蟹の舞の振舞われ
てしるしも」

落花枝にかへると見れば胡蝶かな
散る花に南無阿彌陀佛といふべかな
勢子のももの來べき宵なり泊り狩
子なまうけたる人興行

ねぶらせて養ひたてよ花の雨
花よりも團子やありて歸る雁
夏の日にもむされて咲くや柑子花

皆人のひるねの種や秋の月
冬ごもり虫けらまでも穴かしこ

我等しきが宿にも來るや今朝の春
よしのにて

其角「これはく
とばかり散るも櫻
かな」

これはくどばかり花の芳野山
松かげや月は三五夜中納言
からく身に身はなり果てよなんご蟬
芋も子を生めば三五の月夜かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 西 同 同 貞 同 同 同 貞 同 同 同
武 室 德

論語「祭如在、祭
神如神在」

「難波津に咲くや
この花冬こもり今
を春へと咲くやこ
の花」

銀もちのわたゝかさうに亥の子かな
やあしはらく花に對して鐘つく事
順禮の棒ばかり行く夏野かな
秋やけさ一足に知る拭ひ緑
長崎にて

もめん帆やもろこし船も雲の峯
料理あり錢に冬なし旅もなし
一僕とぼくくありく花見かな

まざくといいますが如し魂祭
女郎花たごはわはの内侍かな
書初や行年七十攝州の住

浪花津にさく夜の雨や梅の花
世の中や蝶々とまれかくもあれ
菜の花や一本咲きし松のもと

松に藤蝸木にのぼるけしきかな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 同 同 宗 同 同 季 同 同 同 同 同 同 同 同 同
因 吟 頼

也有「よい時に補
屋休んで時鳥」
四行「年たけて又
こゆべしと思ひき
や命なりけりさや
の中山」

有明の油ぞ残るほどよぎす
薬罐屋も心してきけはとよぎす
命なり素湯の中山香薷散
しら露や無分別なる置きどころ
風にのる川霧輕し高瀬舟

西行 像 讚

秋はこの法師すがたの夕べかな
やざれとは御身いかなるひと時雨
宇治にて

古今「山川に風の
かけたる橋は流れ
もあへぬ紅葉なり
けり」

里人のわたり候か橋の霜
鴨の足は流れもあへぬもみぢ哉
むかし男の眺めすてし片野の花にゆきて
なんと世に櫻が咲かず下戸ならば
本丸の古道うづむ馬酔木かな
袖をつられて見し花も絶えて女中着る物を今朝名残ぞかし

同 同 同 同 同 同 同 同
同 西 同 同 同 同 同 同
鶴

其角「鯛は花は江
月に生れて今日の
月」

太砥「髭につく飯
さへ見ゆす猫の妻

長持に春かくれゆく更衣
元政の軒かこうたる藜あかきかな
五月雨や淀の小橋の水行燈
ある皇子の忍び歩行や初鳥狩
鯛は花は見ぬ里ももありけふの月
人間五十年の窮りそれさへ我には餘りたるにまして
浮世の月見過しにけり末二年
元日やされば野川の水の音
三味線も小歌ものらす梅の花
兩方に髭があるなり猫の戀
住吉にて
はる風にしら鷺白し松の中
飯蛸のあはれやあれではてるげな
見かへれば寒し日暮の山櫻

同 同 同 同 同 同 同 同
同 同 來 同 同 同 同 同
山

花咲いて死にともないが病かな
 若楓一ふりふつて日が照つて
 ひこり居や蚊屋をきて寝る捨心
 涼しさに四橋を四つわたりけり
 秋たつやはわかみ漬も澄みきつて
 添竹もないに健氣に此の菊の
 我が寝たを首上げて見る寒さ哉
 僧ひこり師走の野道梅の花

大阪も大阪まん中に住んで

お奉行の名さへ覺ねず年暮れぬ

鶯が梅の小枝に糞をして

空道和尚いかなるか是汝が俳眼と問はれしに即答

庭前に白く咲いたる椿かな

草麥や雲雀があがるあれさがる

春の日や庭に雀の砂浴びて

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 鬼 貫

芭蕉「うぐひすや
 餅に糞する縁の先

人の親の鳥追ひけり雀の子

二月末惟然に訪はれてのち錢別

いなうどの花の前なりや留められぬ

から井戸へ飛びそこなひし蛙かな

一鍬や折敷に載せし葦草

桃の木へ雀吐き出す鬼瓦

戀のない身にも嬉しや更衣

竹の子や雪隠にまで嵯峨の坊

やれ壺に澤瀉細く咲きにけり

飛ぶ鮎の底に雲行く流かな

行く水や竹に蟬鳴く相國寺

夕 涼

なんと今日の暑さはと石の塵を吹く

そよりともせいで秋立つ事かいの

家は汐津橋といふ橋のほとり也、前には軒の松風流水にひたしてなほひや、かに後には野徑の

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

虫、時しも野分に吹き送りて、おのれくが聲かすかなり。今は闇なればやがて月のためには
と楽しく覺ねて

闇がりの松の木さへも秋の風

同

向ふは堂島の新家建ちならび、舟きほふ堀江の川嵐に、四海の涙を忘れ入日を惜しむ歸帆、
半ばは屋上に見越して、妾知らぬ旅人の別れを思ふだに、此夕べは更にもかなし

須磨の秋の風のしみたる帆庭か

行水の捨所なき蟲のこゑ

鶉鳴く吉田通れば二階から

縦の木のすんと立たる月夜哉

木にも似ず扱も小さき榎の實哉

古寺に皮むく棕櫚の寒げなり

宇治にて

冬枯や平等院の庭の面

川越わて赤き足ゆく枯柳

青空や鷹の羽せゝる峰の松

同 同 同 同 同 同 同 同 同

高野の玉川

谷水や風に漂ふ月の糞

野田の玉川

いざさらば除穢漉のうで千鳥さこ

宵月の雲にかれゆく寒さかな

よく見れば薺花さく垣根かな

乙州が江戸へ赴く時

梅わかな鞠子の宿のころゝ汁

春雨や蜂の巢つたふ屋根の漏

神路山を出るとて四行の涙をしたひ増賀の信を愁む

裸にはまだきさらぎの嵐かな

何の木の花とも知らず匂かな

落ちざまに水こぼしけり花椿

山路来て何やらゆかし葦草

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

同 同 同 同 同 同 同 同 同

蕉

鬼買「鶯の鳴けは
何やらなつかしう
頼政「花さかばつ
けよといひし山里
の使は來たり馬に
鞍おけ」

西行「ますげ生ふる荒田に水をまかすれば嬉し顔にもなく蛙かな」

春の夜は櫻に明けてしまひけり

憂方知酒聖賢始覺錢神

花にうき世わが酒白く飯黒し

菜畑に花見顔なる雀かな

翌は檜木とかや谷の老木のといへる事あり、きのふは夢と過ぎて明日はいまだ來らずたゞ生前

一樽のたのしみの外に翌はくと言ひくらして終に賢者の讒をうく

さびしさや花のあたりの翌ならう

景清も花見の座には七兵衛

聲よくばうたはむものを櫻ちる

丹波市とかやいふところにて日の暮れかゝりけるに

草臥れて宿かるところやふちの花

望湖水惜春

行春を近江の人とをしみける

きすこといふ魚を網して眞砂の上にはし散らしけるを鳥の飛來りてつかみ去るをにくみて号をもておどすぞ海士のわざとも見ぬすもし古戰場の名残をとどめてかゝる事なすにやといとど

罪深く猶むかしの戀しきまゝに

同 同 同 同 同 同 同 同

蘇杜「春惜む宿やあふみの置火燧」

須磨の蟹の矢先に啼くや子規

嵯峨にて

蜀魂大竹藪をもる月夜

奈良にて鹿の子をうむを見て此日においてなかしければ

灌佛の日にうまれあふ鹿の子かな

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

さみだれをあつめて早し最上川

落柿舎にて

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

江の縦横一里ばかり佛松島にかよひて又異なり松島は笑ふが如く象潟はうらむが如し寂しさに

悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり

象潟や雨に西施がねぶの花

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

山形領に立石寺といふ山寺あり慈覺大師の開基にて殊に清閑の地なり一見すべきよし人々のす

同 同 同 同 同 同 同 同

土期「太秦は竹ばかりなり夏の月」

乙由「閑古鳥われも淋しいか飛んでゆく」

ゝむるによりて尾花澤よりとつてかへす其の間七里ばかりなり日未だ暮れず麓の坊に宿かり置きて山上の堂にのぼる岩に巖を重ねて山とし松柏年舊り土石老いて苔滑かに岩上の院々扉を閉ぢて物音きこはず岸をめぐり岩を這うて佛閣を拜し景佳寂寞として心澄み行くのみ覺ゆ

静さや岩にしみ入る蟬の聲

暑き日を海に入れたり最上川

荒海や佐渡に横たふ天の川

稻妻や闇の方ゆく五位の聲

ひや／＼と壁をふまへて晝寝かな

三井寺の門たゝかばや今日の月

閑人廬牧亭をとひて

蔦植ゑて竹四五本のあらし哉

棧や命をからむ蔦かづら

霧雨の空を芙蓉の天氣かな

猪もどもに吹かるゝ野分かな

吹きこぼす石は淺間の野分哉

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

一茶「木曾山に流
かけり天の川」

去來「鷹の羽もか
いつくろひひ初時

山尊經「豊山之鐘
霜降而鳴」

秋かせや藪もはたけも不破の關

あか／＼と日はつれなくも秋のかせ

さくくの香や奈良には古き佛たち

江戸を立出るとて

旅人どわが名呼ばれむ初雨時

初しぐれ猿も小籠をほしげなり

金屏の松の古びや冬ごもり

雨十月八日旅中吟

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

貧山の笠霜に啼くこゑ寒し

いざ子供はしりありかむ玉あられ

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

によさ／＼と帆柱さむき人江哉

住みつかぬ旅のこゝろや置巨燧

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

伊良古崎は南の海のはてにて鷹のはじめて渡る所といへりいらゝ鷹など歌にもよめりと思へば

子規「無爲にして
海鼠一萬八千歳」

猶あはれなる折ふし

鷹一つ見付けてうれしいらこ崎
生きながら一つに氷る海鼠哉

旅寝ながらに年のくれければ

としくれぬ笠着てわらぢはきながら

芭蕉曾良錢別

松島の松陰にふたり春死なむ

春もはや山吹白く荳苦し

或人の羽織夏化せば何にかならむと申されしに

語となりぬべうなり茶の羽織

鎌倉一見の頃

目には青葉山郭公はつ鯉

鳥うたがふ風蓮露を磔けり

西瓜ひとりの野分をしらぬ朝かな

いつくしま

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

堂

宗賦「名も知らずの
小草花さく川べりな」

回廊に汐みちくれば鹿ぞ啼く

南瓜やすつしり落ちて暮淋し

仕着せもの皆着揃うて春の宿

子や待たんあまゝり雲雀の高あがり

提灯の空に詮なし時鳥

がつくりとぬけそむる齒や秋の風

鐘の音物にまざれぬ秋の風

川ぞひのを鳥ありく月見かな

菊畑おくある霧のくもりかな

名はしらす草毎に花哀なり

風は何やら一羽寒げなり

巻つきしその草もに枯かつら

諂の中にかくれて冬籠

鶯に手もと休めん流しもと

孫を愛して

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

風

月

麥藁の家してやらん雨蛙

あるどなきと二本さしけり芥子の花

崎風はすぐれて涼し五位の聲

淋しさを我もの顔や秋の鳩

雪の夜や臙豆腐のなつかしき

待つ春や氷にまじる塵あくた

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春

うぐひすの身を逆にはつねかな

無車馬喧

夕日影町中にごぶ胡蝶かな

菓子盆にけし人形やもゝの花

傀儡師阿波の鳴戸を小うた哉

芳野山ぶみして

明星やさくらさだめぬ山かつら

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

角

宰府参詣の舟中

菜のはなの小坊主に角なかりけり

越後屋に絹さく音や更衣

歴々や下馬のをりふし時鳥

ほとゝぎす一二の橋の夜明かな

七十餘の老醫身まかりて弟子どもこぞりて泣くまゝ予に追善の句を乞ひけるその老醫のいまそ
かりける時さらに見しれる人にもあらず哀にも思ひよらずして古來稀なる年にこそなどいへど
とかく許さざりければ

六尺もちからおとしや五月雨

竹の尻を折ふしきくや五月閑

自 愧

夜あるきを母寝ざりける水雞哉

かたつぶり酒の肴に這はせけり

夏の月蚊を疵にして五百兩

夜着をきてあるいて見たり土用干

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

蘇東坡「春宵一刻
值千金花有清香月
有陰」
去來「體着て疲た
めさむ土用干」

白雨にひとり外見る女かな
夕だちや家をめぐりて啼く家鴨

傳九郎が持ちし扇に

朝比奈の樂屋へ入りしあつさ哉
投げられて坊主なりけり辻角力
あさざりに一の鳥居や波の音

歟此夕愁人は猿の聲を釣る
聲かれて猿の白齒し峯の月

名月や疊の上に松のかげ

たけがりや鼻の先なる歌がるた

爐開や汝をよぶは金の事

周防殿は才ある人にて政事行はるゝに「生非なし、ひなきをめで、板倉殿と申すとかや此中よ

り錢を拾ひて

こたつから青砥が錢をひろひけり

炭屑にいやしからざる木の葉哉

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

去來「松茸や人にとらるゝ鼻の先」
蜀山人「秋の田の歌がかりほの庵の歌がた手もとにありしれぬ茸狩」

源氏物語、横笛「御齒のおひいづるに、くひあてんとて、笋をつと握りて、し給へば云々」

此の木戸や鎖のさゝれて冬の月
使ひとり書院へ通る寒さ哉
行幸の牛洗ひけり年のくれ
元日やはれて雀のものがたり
ぬれ縁や薺こぼるゝ土なから
梅一輪一りん程のあたゝかさ
石女の雛かしづくぞあはれなる
順禮にうちまじり行く歸雁かな
出かはりや幼心にもあはれ
古庭にあり來りたるぼたん哉
竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき

坂本の宿にとまりたるに樵木つかたる火たき屋の隅に具足と太刀の埃にまじりて侍りけるを持ち傳へたる故やあるとたづねければ爰のならばしにてかばかりの器具もたらぬ家は侍らずと申しける心にくかりける

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

雪

文もなく口上もなし粽五把
おもふ人にあたれ印地のそら碟

紀の山紀の浦海に入り江に在る禹益の水を治めて異物をしるせる海外山表のありさまルスカ
ホチャなどいふ遠津島根の人からは書にのみ見たり目前に南のほびすの洞にかくれいはほに走
るを鬼にもせよ人にもせよこころわかるゝ旅寝なり

蛇いちご半弓提げて夫婦づれ

秋風の心うごきぬ繩すだれ

真夜半やふりかはりたる天の川

名月や烟這ひゆく水のうへ

はせ釣や水村山廓酒旗風

百菊をそるへけるに

黄菊白菊其外の名はなくもかな

ふごん着て寝たる姿や東山

冬の日客をもてなす

君見よや我が手入るゝぞ莖の桶

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

杜牧「千里鶯啼綠
映紅水村山廓
酒旗風、南朝四
八十寺、多少樓臺
烟雨中」

門の雪白とたらひの姿かな

鶯や茶の木畑の朝月夜

朝ごごに同ト雲雀か屋根の空

大原や蝶の出で舞ふ朧月

鳶の輪の崩れて入るや山櫻

花曇田螺のあとや水の底

時鳥なくや湖水のさゝ濁り

菜種殻焚くや野風の子規

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸

白雨に走り下るや竹の蟻

稻妻のわれて落つるや山の上

つれのある所へ掃くぞきりくす

病人と撞木に寝たる夜寒かな

越中翁塚手向

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

草

入る月や時雨る、雲の底光り

ばせを翁の病床に侍りて

うづくまる薬の下の寒さかな

しまき来る雪の黒みや雲の間

狼の聲そろふなり雪の暮

淋しさの底ぬけて降る霰哉

水底を見て来た顔の小鴨哉

ほた／＼と朝日さしこむ炬燵かな

贊 交

まじはりは紙衣の切を譲りけり

元日や家にゆづりの太刀佩かん

上り帆の淡路はなれぬ潮干かな

鉢たゝき来ぬ夜となれば臙なり

うごくとも見ねで畑打つ男かな

何事ぞ花見る人の長刀

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

來

太祇「飛石にとかさの光る曇さかた

湖の水まさりけり五月雨

石も木も眼に光るあつさかな

蠅ならふはや初秋の日數かな

岩端や爰にもひとり月の客

秋風やしら木の弓に弦はらん

鳶の羽もかいつくろひぬ初しぐれ

一時雨しぐれてあけし辻行灯

こがらしの地にも落さぬ時雨かな

牛賣て伯父と道きるしぐれ哉

荒磯やはしり馴れたる友千鳥

ゆづりはの莖も紅さすあしたかな

鼻紙の間にしげむ董かな

四月朔日當麻寺にて

更衣みづから織らぬ罪深し

引裾にも忘れけり更衣

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

女

負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉

小原女や野分に向ふ抱帯

しれものゝ舎か寒し柵木原

鶯や下駄の齒につく小田の土

越より飛彈へゆくとして籠の渡の危きところく道もなき山路にさまよひて

鶯の巢の樟の枯枝に日は入りぬ

花散るや伽藍の樞落しゆく

骨柴の刈られながらも木の芽かな

曙や董かたむく土龍

ほとゝぎす何もなき野の門構

渡りかけて藻の花のぞく流かな

上行くと下來る雲や秋の空

初潮や鳴戸の波の飛脚船

灰汁桶の雫やみけりきりくす

三葉散りてあどは枯木や桐の苗

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 凡 同 同 同 兆

時雨るゝや黒木つむ屋の窓明り

禪寺の松の落葉や神無月

呼かへす鮎賣みねぬ敷かな

下京や雪つむ上の夜の雨

長々と川一筋や雪の原

古寺の簀子も青し冬がまへ

やせ骨を出して雲雀の日和かな

水鳥の胸に分けゆく櫻かな

つりそめて蚊屋のにはひや二三日

白砂やしよろりと生ねし今年竹

冷々と小路へはひる残暑かな

馬宿にすそ湯沸すや霧も立つ

秋風の吹きぬく舟の世帯かな

名月や土手のはづれのなびき藪

林 紅 亭

同 同 同 同 同 同 同 浪 同 同 同 同 同 化

一茶「寝並んで遠
夕立の評議かな」

鳥ども、寝入つて居るか余吾の海
いねくゝと人に云はれたる年の暮
長松が親の名で来る御慶かな
はき掃除してから椿散りにけり
苗代や二王のやうな足の跡
行雲を寝て居て見るや夏座敷
この頃の垣の結目や初時雨
小夜時雨隣の日は挽きやみぬ
燈火も動かで丸し冬ごもり
歟さげて叱りに出るや桃の花
つかむ手の裏を這うたる螢かな
木枯の一日吹いて居りにけり
汁鍋のあとむづかしや冬籠
船頭の耳の遠さよ桃の花
歌書よりも軍書に悲し吉野山

同 野 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 支 同 同 同 凉 同 同 同 同 同 同 同
考 菟 坡

其角「西瓜くふ奴
の髭の流れけり」

川柳「蠅が来て晝
寝の顔を皺にする」

三文「雁は八百矢は
大江丸「眼をあけて
聞いて居るなり
花の春」

出女の口紅惜しむ西瓜かな
牛叱る聲に鴨立つ夕かな
食堂に雀鳴くなり夕時雨
燕や何を忘れて中がへり
月花の目をやすめばや子規
浮草や今日はあちらの岸にさく
くさめして見失ひたる雲雀かな
小便はよその田へして早苗どり
蠅が来て蝶にはさせぬ午睡かな
物まうの聲に物着る暑さかな
仲國が耳に邪魔なる砧かな
庭ばかり流行る醫者ありけふの菊
三文もせぬ矢を雁に案山子かな
目を明けて聞いて居るなり四方の春
羽根つくや世どころ知らぬ大またげ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 太 同 同 同 同 同 也 同 同 乙 同 同 同
祇 有 由

蕪村「高麗舟のよ
らで過ぎ行く霞か
な」

川下に網うつ音やおぼろ月
欺いて行きぬけ寺や朧月
矢橋乗る姫よむすめよ春の風
出替の疊へおとすなみだかな
人音にこけこむ龜や春の水
大船の岩におそるゝ霞かな
ふりけむけば燈ともす關や夕霞
山路來て向ふ城下や風の敷
行く女裕着なすや憎きまで
敷屋つるや夜學を好む眞裸
とり逃がす隣の聲や行く螢
鉾處々にゆふ風そよぐ蟻子かな
折悪しと角をさめけむ蝸牛
暑き日に水からくりの濁かな
白雨や膳最中の大書院

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

几董「欠して月ほ
めて居る隣かな」
古今「みさむらひ
御笠と申せ宮城野
の木の下露は雨に
まされり」

帷子や蠅のつと入る袖のうち
橋落ちて人岸にあり夏の月
初戀や燈籠によする顔と顔
着物のうせてわめくや辻角力
彼の後家のうしろに踊る狐かな
十三夜月は見ると隣から
寝よといふ寢覺の夫や小夜砧
玄關にお傘と申す時雨かな
冬枯や雀のありく戸樋の中
をござせぬ娘つれゆく十夜かな
寒月の門へ火の飛ぶ鍛冶屋哉
闇がりの柄杓にさはる氷かな
下戸ひとり酒に逃げたる火燧かな
犬にうつ石の扱なし冬の月

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

歸去來辭「三徑就荒松菊猶存」

几童「鳥羽殿へ御歌使や夜半の雪」

曉臺「古琴や鼠出て行く春の暮」

川柳「化けさうなのでもよいかと傘を貸し」

芭蕉「葱白く洗ひあけたる寒さかな」

荊柯「風蕭々兮易水寒壯士一去兮不復還」

月天心貧しき町を通りけり

かなしさを釣の糸吹く秋の風

三徑の十歩につきて蓼の花

鳥殿殿へ五六騎いそぐ野分かな

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

しぐるゝや鼠のわたる琴の上

化けさうな傘かす寺の時雨かな

大徳の糞ひりおはす枯野かな

几童と浪華より歸さ

霜百里舟中に我月を領す

易水にねぶか流るゝ寒さかな

斧入れて香におごろくや冬木立

玉霰漂母が鍋をみだれうつ

寒月や衆徒の群議の過ぎて後

鯨賣市場に刀を鼓しけり

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

去來「たま／＼に三日月拜む五月かな」

虚子「提灯に落花の風の見ゆるかな」

燕村「日歸りの元山越る暑さかな」

世の中は三日見ぬ間に櫻かな

むつとして戻れば庭に柳かな

五月雨やある夜ひそかに松の月

蟲干や紙魚聲あらば句や鳴かん

わが影の壁にしむ夜やさり／＼す

猫の目のかまごに光る寒さかな

燈火を見れば風あり夜の雪

出て遊ぶ繪馬の沙汰あり朧月

水のない川掘る人や桃の花

子規几帳はなるゝ人の影

松一里歸路暑き日を荷ふかな

鴉なく秋の柳や長づつみ

枯蘆や低う鳥立つ水の上

水仙や此花のもこの飯袋子

繪草紙に鎮おく店や春の風

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

太 水 董

虚子「墓拜む人の
うしろを通りけり」

勅額の尊く霞む櫻かな
かしこくも花見に來たり明日は雨
みよか夜に敵の後を通りけり
蚊遣木にたま／＼沈の匂ひ哉
涼しさや遠く茶運ぶ寺扈從
稻妻や山城の山河内の川

高雄山

紅楓深し南し西す水の隈
いたく降ると妻に語るや夜半の雪
貫之が船の灯による千鳥かな
雛の宴五十の内侍酔はれけり
たんぼもけふ白頭にくれの春
淋しさは天井高し寺の蚊屋
短夜や老知りそむる食もたれ
白馬寺にに如來うつしてけさの秋

同 同 同 同 召 同 同 同 同 同 同 同

波

蕪村「猿どのの夜
寒とひゆく兎かな」

鳴雪「山僧の太
刀洗ふ清水かな」

子規「秋の山もの
の煙の空に入る」

子の顔に秋風白し天瓜粉
傘の上は月夜の時雨かな
憂きことを海月に語る海鼠かな
足袋脱いで小石振ふや董草
古雛や櫻がくれのうらみ顔
筭やひとり弓射る屋敷守
午眠さむれば眞桑よき程に冷ねたり
悪僧の天窓冷せし清水かな
衣擣つ女疲れて月は西
山風や蔽ふきこむ馬の耳
藪入や獅子の口より見初めけり
梅に月朗詠うたふ人あらん
秋の山どころ／＼に煙立つ
曉や鯨の吼ゆる霜の海
蠅一つわれをめぐるや冬籠

同 同 同 同 曉 同 同 同 同 同 同 大 同 同 同

魯

臺

紙漉きの手許に散るや春の雪
 春風や肩に乗る子の振り鼓
 五月雨や鼠の廻る古葛籠
 水わりや家鴨の覗く萩の下
 枯蘆の日にく折れて流れけり
 人戀し灯ごもし頃を櫻散る
 夕潮や柳かくれに魚わかつ
 花芥子にくんで落ちたる雀かな
 めくら子の端居淋しき木槿かな
 寒月や石切山の石佛
 大蟻の壘を歩く暑さかな
 名月に露の流るゝ瓦かな
 足輕のかたまつて行く寒さかな
 手をうたば散りもやすらむ初櫻
 どこやらに女さびしき袷かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 蘭 更 雄 朗 丸

敏行「秋來ぬと目
 にはさやかに見ゆ
 れども風の音にぞ
 驚かれぬる」

千兩のかくし妻あり杜若
 宇治殿の障子立てけり麥のあき
 白團扇隣の蕤之に書かれけり
 夏瘦や西日さしこむ竹格子
 秋來ぬと目にさや豆のふどりかな
 霧雨に小室うたふはたれが馬
 去年賣りし牛にあひけり秋の風
 花すゝき吹かれながらに日は入りぬ
 昔男まこのでとくおはしけむ
 尼といふ願にて
 清盛の文張つてある火桶かな
 東風吹いて小松がもとの土筆かな
 虎杖の二葉に見るや雉の糞
 花の雨てりく小法師まけにけり
 あゝ瘦せたり命うれしき蚊帳のうち

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 冥 々

酒桶を乾かす日なり茨の花
晝顔のもとに氣を吐く石龍かな
おどろへし鶺鴒の夢や今朝の秋

霜 後

鳴かずなりしがある夜さり蟋蟀
老いて行く長者に子なき寒さかな

川千鳥月は林にかくれけり

寒菊や塵のつもりし琴の上

めでたさも中位なりおらが春

鳴く猫に赤ん目をして手毬かな

○雀の子そこのけくお馬が通る

玉川やまづお先へと飛ぶかはづ

蛙た、かひといふを見にまかる、四月二十日なりけり

○瘦蛙負けるな一茶こゝにあり

晝めしをたべに下りたる雲雀かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

茶

子規「めでたさも
一茶位や雑煮餅」

長閑さや浅間の煙晝の月

陽炎や手に下駄はいて善光寺

春雨や食はれ残りの鴨が鳴く

晝の蚊やだまりこくつて後から

粒々皆辛苦

もたいなや晝寢して聞く田植唄

大笠ゆらりくくと通りけり

我袖を親とたのむか逃げ螢

やれ打つな蠅が手をする足をする

新 瀛 に て

下駄ころりからり彼奴等が夕納涼

裏屋のつきあたりに住す

涼風の曲りくねつて來りけり

蟻の道雲の峯よりつゞきけり

木曾山に流れ込みけり天の川

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

稱妻やうつかりひよんどした顔へ
 秋風や壁のへママシヨ入道
 寝がへりをするぞ脇よれきりぐす
 泣くなどて母が踊るや門の月
 明月の御覽の通り屑家かな
 けふもく絲引すつて蜻蛉かな

善光寺御堂庭乞食

重箱の錢四五文や夕しぐれ
 芝原や小春仕事に塗る烏居
 づぶぬれの大名を見る炬燵かな
 門先にちよいと渦く木の葉かな
 大根引大根で道を教へけり
 朝晴にばちく炭の機嫌かな
 うまさうな雪がふうはりくど
 梟よのほん所か年の暮

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

室

節季候や七尺去つて小節季候
 元日や鬼ひしぐ手も膝の上
 流れくる餘所の早苗も植ゑにけり
 暑き日や立寄るかげも漆の木
 折兼ねてあはれのさめる木槿かな
 京の鐘聞ゆる里の小春かな
 口紅や四十の顔も松の内
 春風にこぼれて赤し齒磨粉
 雪残る頂一つ國境
 菜の花や小學校の晝餉時
 病間あり
 足の立つうれしさに萩の芽を検す
 早鮓や東海の魚背戸の蓼
 内閣を辭して薩摩に晝寝かな
 蚊をたぐいそがはしさよ寫し物

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

規

麻刈りて鳥海山に雲もなし
 夏葱に鶏裂くや山の宿
 河骨の水を出かぬる苔かな
 藻の花や水ゆるやかに手長鯢
 犬が来て水のむ音の夜寒かな
 山門をぎいと鎖すや秋の暮
 椎の木を伐り倒しけり秋の空
 最上川
 朝霧や舟かゝり居る裏戸口
 出 羽
 夕陽に馬洗ひけり秋の海
 縁日へ押出す菊の車かな
 夕鳥一羽おくれてしぐれけり
 甲板に霰の音の暗さかな
 汽車道の一段高き冬田かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

一茶「菊の花都の
 鬼が之を食ふ」

並べけり火燧の上の小人形
 むつかしく炭團に炭をつぎかけし
 麥蒔やたばねあげたる桑の枝
 元日や一系の天子不二の山
 から／＼と切風走る河原かな
 汁椀に大蛤の一つかな
 城門に蝶の飛びかふ日和かな
 銀瓶に八重山吹を亂れさす
 矢車に朝風強き幟かな
 打水に芥子散る土の匂ひかな
 はとゞぎす遠侍の軒かな
 貫ひ來る茶碗の中の金魚かな
 與謝の海や藍より出でゝ夏木立
 税苛し蕘畑の秋の風
 名月や橋高らかに踏み鳴らし

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

雪

空家に下駄で上るや秋の雨
秋晴れて五重の塔の掃除かな
松の木に太鼓打つなり村相撲
残る蚊に蒲團を被るひとりかな

三十八年時事

菊の宴創をつゝんで陪しけり

本来空といふことを

稻妻のあさは野山も無かりけり
女一人僧ひとり雪の渡しかな
初冬の竹緑なり詩仙堂
冬の夜や小犬啼きよる窓明り
二君には仕へ申さぬ紙衣かな
一番の渡り漁師や雪解風
驛鈴をしば聞く日なり爐塞ぎぬ

劍 路

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
同 碧 梧 桐

虎杖や古屯田の墓所構
畑打の四五人よりし晝餉かな
短夜や町を砲車の過ぐる音
税打ちの明日を見廻る浮藻かな
馬方の喧嘩も果てゝ蚊遣かな
簀の中のゆるき流れや水馬
遠花火音して何もなかりけり
谷深うまこと一人や漆搔
雨に泊れば雨は晴れたる蜻蛉かな
蜻蛉や西日静かに稻薙
木犀に薪積みけり二尊院
牧場主言訥にして新酒かな
ありといふ小屋にも出でず冬木立
大鍋にくづれて甘きかぶらかな
北風や磧の中の別れ道

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

楠の根を静かにぬらす時雨かな
 松立してし官署や人に親しめり
 大船の尻振りかはる日永かな
 春風や闘志いだきて丘に立つ
 もたれあひて倒れずにある雛かな
 ほろ／＼と泣き合ふ尼や山葵漬
 凌霄花の花の暗さやはた、神
 莫産とれば青き祭の疊かな
 曝書風強し赤本飛んで金平怒る
 今日の日も衰へあほつ日除かな
 灯ともせばはやそこ飛べり灯取蟲
 秋立つやまこと貌なる物狂ひ
 裸火を抱く袖明かし秋の雨
 鶏の空時つくる野分かな
 桐一葉日當りながら落ちにけり

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 子

芭蕉「此道や行く人なしに秋の暮」

足早き提灯を追ふ寒さかな
 地球凍てぬ月光之を照しけり
 言はでやむ事糞になれ年の暮
 船頭の綿子着て居る霰かな
 青き色の残りて寒き干菜かな
 春の夜や灯を圍み居る盲達
 柚の子の二つ持ちたる手毬かな
 闘鶏の眼つぶれて飼はれけり
 小百姓の嬉しき布施や草箒
 夏草に這上りたる捨蠶かな
 浅間山の煙出て見よ今朝の秋
 街道やはてなく見わた秋の風
 瘦馬のあはれ機嫌や秋高し
 娼家の灯うつりて海の無月かな
 飼猿や巢箱を出で、月に居る

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 城

土くれに二葉ながらの紅葉かな
 庵主や寒き夜を寝る頬冠
 小春日や石を噛み居る赤蜻蛉
 冬の日や前にふさがる己が影
 冬蠅をぶりて飽ける小猫かな
 冬蜂の死に所なく歩きけり

同 同 同 同 同 同

二連句選

猿 蓑

市中は物のにほひや夏の月
 暑し〜と門々の聲
 二番草取りも果さず穂に出で、
 灰打ちたくくうるめ一枚
 此筋は銀も見知らず不自由さよ

去 芭 凡

蕉 兆 來 蕉 兆

只ごひやうしに長き脇差
 草むらに蛙こはがる夕まぐれ
 露の芽取りに行燈ゆり消す
 道心の發りは花の苔む時
 能登の七尾の冬は住み憂き
 魚の骨しはぶる迄の老を見て
 待人入りし小御門の鑑
 立ちかゝり屏風を倒す女子ども
 湯殿は竹の簀子わびしき
 茴香の實を吹落す夕あらし
 僧やゝ寒く寺に歸るか
 猿曳の猿と世をふる秋の月
 年に一斗の地子はかるなり
 五六本生木つけたる水溜り
 足袋ふみよぞす黒ぼこの道

蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來

追立て、早き御馬の刀持
 丁稚が荷ふ水こぼしたり
 戸障子も筵がこひの賣屋敷
 天上守りいつか色づく
 こそくと草鞋を作る月夜ざし
 蚤をふるひに起きし初秋
 その儘にころび落ちたる樹落し
 ゆがみて蓋のあはぬ半櫃
 草庵に暫く居ては打破り
 命うれしき撰集の沙汰
 さまぐくに品かはりたる戀をして
 うき世の果はみな小町なり
 何故ぞ粥すゝるにもなみだぐみ
 お留守となれば廣き板敷
 手のひらに風這はする花の蔭

蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來

霞動かぬ晝のねぶたさ

炭 俵

梅が香にのつと日の出る山路かな
 ところ／＼に雉子の啼き立つ
 家普請を春の手すきに取付きて
 上のたよりにあがる米の直
 宵の中はら／＼とせし月の雲
 藪ごし話す秋のさびしき
 お頭へ菊貰はるゝ迷惑さ
 娘をかたう人にあはせぬ
 奈良通ひ同じつらなる細元手
 今年は雨の降らぬ六月
 預けたる味噌取りにやる向河岸
 ひたといひ出すお袋の事

野 芭

蕉 坡 蕉 坡 蕉 同 坡 同 蕉 同 坡 蕉 來

夜もすがら尼の持病をおさへける
 蒟蒻ばかり残る名月
 初雁に乗懸下地敷いて見る
 露を相手に居合一ぬき
 町衆のつらりと酔うて花の蔭
 門で押さるゝ壬生の念佛
 こち風にこねのいきれを吹廻し
 たゞ居るまゝに肱わづらふ
 江戸の左右向ひの亭主のぼられて
 此方にもいれどから白をかす
 方々に十夜のうちの鐘の音
 桐の木高く月冴ゆるなり
 門しめて黙つて寝たるおもしろさ
 拾うた金で表がへする
 初午に女房の親子振舞うて

蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 同 蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡

又この春もすまぬ牢人
 法印の湯治を送る花ざかり
 繩手を下りて青麥の出来
 どの家も東の方に窓を明け
 魚に喰ひ飽く濱の雑炊
 千鳥啼く一夜／＼に寒うなり
 未進の高の果てぬ算用
 隣へも知らせず嫁をつれて来て
 屏風のかげに見ゆる菓子盆
 ○
 秋の空尾の上の杉に離れたり
 おくれて一羽海渡る鷹
 朝露に日傭揃ふる貝吹きて
 月の隠るゝ四扉の門
 祖父が手の火桶も落すばかりなり

孤 其

蕉 坡 蕉 坡 蕉 坡 同 坡 蕉 坡 同 角 同 屋 角

傳ひ道には丸太ころばす
 下京は宇治のこね舟さし連れて
 坊主の着たる蓑はをかしき
 足輕の子守して居る八つ下り
 息吹きかへす霍亂の針
 田のくろに早苗たばねて投げて置く
 道者のはさむ編笠の節
 行燈の引出し探すはした錢
 顔に物着てうたゝ寝の月
 鈴繩に鮭のさはれば響くなり
 雁のさげたる筏流るゝ
 貫之の梅津桂の花もみぢ
 むかしの子あり忍ばせて置く
 いさ心跡なき金のつかひ道
 宮の縮の新しきうち

屋 同 角 屋 角 屋 角 屋 角 屋 角 屋 角 同 屋

夏草の蚋にさゝれてやつれけり
 あばたといへば小僧いやがる
 年の豆蜜柑の核も落散りて
 帯解きながら居風呂を待つ
 君來ねばこはれ次第の家となり
 稗と鹽との片荷つる籠
 辛崎へ雀のこもる秋の暮
 北より冷ゆる月の雲行
 紙燭して尋ねて來たり酒の殘
 上塗なしに張つて置く壁
 小栗讀む片言ませて哀なり
 けふもだらつく浮前の舟

屋 角 屋 角 屋 角 屋 角 屋 角 屋 角

孤屋旅立つ事出來て洛へのぼりけるゆるに今四句未滿にして吟終
 りぬ

大正十三年三月廿八日印刷 (非賣品)
大正十三年四月五日發行

第七高等學校國語科編纂

鹿兒島市中町七七番戶

發行兼
印刷者 谷村藤吉

鹿兒島市中町七七番戶

印刷所 谷村書肆印刷部

終